

NICHE 窓



# 龕 NICHE

がん【龕】 ①仏像を納める厨子。②棺(ひつぎ) - 広辞苑 -

ニッチ【niche】 (㊟Nische)、がん(龕)とも書かれる。壁体内に掘られ、多く平面半円、半円筒状で、上に1/4半球をいただく凹所、彫像などを置く。 - 共立・建築辞典 -

niche (nich), n. [Fr. niche, from L. nidus, a nest] 1. a recess or hollow in a wall usually intended for a statue, bust, or vase. 2. a place or position particularly suitable for the person or thing in it - Webster's New Twentieth Century Dictionary -

ニッチ No.14 目次

---

* 35年の建築学科〈南迫哲也〉	1
* 新大学棟竣工と 建築学科の近況〈荻原正三〉	2
* 鈴木啓之氏に聞く －先輩を訪ねて その5－	3
* いま、木造(在来軸組構法)住宅は……？ 〈大塚 毅〉	13
* 八王子のまちづくりを考える 自ら住むまち八王子で考えて来たこと 〈関谷真一〉	19
八王子青年会議所運動とまちづくり 〈大津和文〉	24
* 同窓生ニュース	
・ 千葉稔さん 第8回朝日似顔絵大賞受賞	29
・ 工学院大学校友会 創立90周年記念式典挙行	29
・ 9年ぶりの再会(城友会 三好 薫)	30
* 第23期(1988年)一般会計報告	31
* 第24期(1989年)一般会計報告	32
* 同窓会運営委員	
* 同窓会誌(ニッチ)発行のための賛助金者	34
* 平成元年度建築学科卒業生名簿	37

# 35年の建築学科

建築学科同窓会会長 南 迫 哲 也

今年、工学院大学に建築学科ができて35年の歳月が経過したことになる。この間、多士済々の卒業生が輩出したことを私はこの目で見てきた。なぜなら丁度創設した年に私は入学し、卒業後もズーッと大学に留まっているからである。

もちろん、大学の前身である、短大、工学院、工手学校の頃の卒業生の方々にも社会で一流の仕事をしておられる多くの先輩方とも知り合う機会に恵まれた。

考えてみると、偶然にも行き合った人々であるにもかかわらず、何故か近親の情を禁じえないのはなぜだろうか、不思議である。しかし、この気持ちをお大切にすることから、いろいろなことができるように思われるのである。

昨年9月、超高層の大学棟に移った。キタナクで、なんとなく騒々しかった工学院大学から、真新しい、ハメコロシガラスのために予想以上に静かな研究室で仕事に没頭できるのは大変ありがたいことです。しかし空気が汚染(?)されるとどうにも致し方なく我慢ただ我慢、ジッと待つだけ……。

今年、評議員の改選期です。建築学科同窓会からは、小高鎮夫氏、神前健氏、南迫哲也の3人が

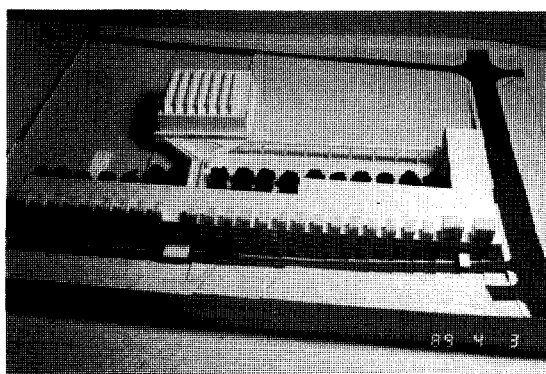
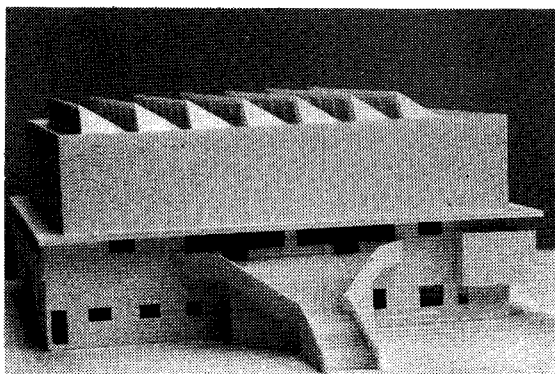
推薦されました。また、校友会からも建築学科の田積晃氏が推薦されましたので、合計4人が学校法人の評議員となることになりました。

100周年記念の募金にまだ応えておられない方が大変多いようです。生涯にただ一回限りの母校への記念すべきときですから、まだ拠出されていない方は今年ぜひよろしくお願ひ申し上げます。同窓会長が非力であるから皆が協力してくれないのではないかと非難があつては立つ瀬がありません、よろしくお願ひ申し上げます。

ニッチの協力金いつもありがとうございます。どうにか連続して発刊できており、皆様の御好意で長続きしております、本年もよろしくお願ひ申し上げます。

名簿に対する御希望が昨年、いつもより多くの会員の方々からありましたので、急遽、印刷いたしました、残部がなくなるまで発行しないという方針に変わりはありません。多くの方が早く購入していただければ、また新しいものがつくれるというものです。これについても御協力をお願ひ申し上げます。皆様の御活躍を願っております。

(昭和34年卒)



(工学院大学高等学校校舎及び体育館改築計画第一次案)  
100周年募金記念事業 計画-南迫

# 新大学棟竣工と建築学科の近況

建築学科主任教授 萩原正三

## 1. 新大学棟竣工

ご承知のとおり高山理事長と伊藤学長のコンビによって昭和62年7月に着工された28階建ての高層大学棟は2年間の超スピードで平成元年8月1日無事竣工した。地下6階地上28階建て、約3万㎡の延床面積が使えることになり、地下は機械室や実験室、3～10階が教室、11～15階が法人、教学関係の事務、電算センター、図書館、16～27階が各科の研究室で、建築学科は24階に環境設備系、25階に科事務室と構造系、生産系、26階に計画・デザイン系の研究室があり、中央部に広い学生ラウンジがある。9月に引っ越してから12月までに室内家具その他が整い、卒論、卒計に入った4年生を中心によく利用されている。新棟の計画、建設、家具・設備等の整備は松浦本部長を中心とした開発本部が当たったが、建築の波多江、谷口の両先生は専門家として計画調整などに大変な努力をされた。続いて中層棟、オフィス棟等の二期工事のための既存建物の撤去が始まり、平成4年夏までには建物の全容が見られる予定になっている。

関連して八王子キャンパスに山下先生の計画による総合工学研究棟も完成し、続いて南迫先生の計画による高校新体育館の建設が始まろうとしている。

## 2. 情報化の促進と教育内容の革新

建物や目に映る設備などが新しくなったというだけでは十分でない。大学本来の教育研究内容を時代に即し未来を見すえて大いに革新していく必要があることは当然で、昭和61年2月、当時の伊藤学長時代に決定された「学園将来計画要綱」にも明確にその方向性が示されている。

まずその第一歩として、教育、研究、事務等を有機的、効果的にネットワークで結び、新宿・八王子間を学内コミュニケーションネットワーク化する「学園統合情報システム(SSP)」推進の為の「同センター」が発足し、新年度からの入学生には全員に情報基礎教育をする具体策が進んでいる。将来は多様な支援システムを充実させてアメリカのカーネギーメロン大学のようなコンピューターを自由に駆使できる能力を持つ学生を社会に送り出せるように努力している。

さらに、北郷学長、田中新企画担当常務理事を中心として、総合工学研究所、新学部増設など大胆な計画構想が始まろうとしている。

建築学科は既に数年前から学科拡充将来計画を策定しており、2年ほど前から新コース設置計画を固めつつあり、昨年中にその大枠は学科の合意を得て実施案の検討に入っている。学科定員は文部省の臨時定員増推進策の方向に沿って250名を越えようとしているので、学科内に都市建築デザイン系を専攻するコースを新たに設置し、都心型大学に相応しい特徴をもった新しい教育研究分野を確立し、社会が求め、時代が必要とする創造性に富んだ活力ある学生たちを養成することを目指している。その中心はデザインの山下教授、都市計画の中嶋教授である。

3. 最後に建築学科の近況としては次のとおりである。

① 今泉勝吉教授が日本・ベルギー両国の学術文化交流に盡した功績を認められ同国リエージュ国立大学から名誉博士号を授与された。日本人としてベルギーから名誉博士号をおくられたのは初めてのことで、記念のメダルとマントを贈られた。帰国後の10月末に建築会館で記念講演会と祝賀会が開かれた。誠におめでたいかぎりである。

② 文部省と大学開発特別設備予算によって25階の建築学科CAD室にイギリス生れARCヤマギワ発売の建築用CAD(CADシステムとしては最高レベル)装置が2セット導入された。CADシステムによる設計、3次元ソリッドモデル作成、力学・流体・熱解析3次元CG表示など視覚化された高次のシステム操作によって高度な研究・教育効果を上げることができる。我国では大手企業の外は明治大などまだ2～3の大学・高専に導入されているに過ぎない最新鋭の装置である。今後、十分に利活用する計画を立案している。

③ 同様に、大学特別設備予算とゼネコン4社の指定寄付により高層ビル強震強風振動測定システム装置が設置され、24時間連続測定を開始している。測定結果は大学とゼネコン4社の研究委員により構成されている研究委員会(委員長十代田教授)によって解析研究されることになり、新しい学・産共同研究体制がスタートし成果が期待されている。

④ 教育体制としては、前東京工大教授小林啓美先生を客員教授としてお迎えすることになり、また、谷口、初田両講師の助教授への昇格が決定されている。



## 鈴木啓之氏に聞く

### —先輩を訪ねて その5—

聞く人 篠原，初田，岩田

鈴木(Su) まあ、昔のことを聞かれると非常に嬉しいんです。私の頃、工手学校は築地にあった。私は芝の二本榎に育ったんですね。先祖代々、江戸っ子なんですね。本家は麴町。麴町は半蔵門のそばです。

篠原(S) ああ、そうですか。

初田(H) あのう、お生まれが確か明治33年ということでしたか。

Su 10月3日。私は、鈴木家には養子なんですね。

H そうなんですか。

Su 母方の養子なんです。先祖代々、江戸城の普請奉行の家柄ですわ。鈴木家は。

S それで結局は建築の方へ入られたのですか。

Su その頃は、早稲田大学かあるいは築地かというんで、築地の工手学校へ入ったんです。工手学校というのは、その頃実用的な技術家養成の教育をしていました。工手学校と言ったらもう天下に名を響いてね……。現実的技術で世の中に貢献するのが築地でした。あなたの頃はどうか？

S ぼくは、昭和3年に入りましたからね。丁度新宿の学校が開校した時。築地が焼けて日本中学を借りておまして、その後、旧校舎の本館と言った淀橋寄りの建物で昭和3年の3月から授業が始まったわけです。

Su ああ、そうですか。そうそう、鈴木啓之という名前も後で改名したんだな。在学中は鈴木仙治という名前でした。その名前ですーときていた。岩田(I)「台所文化史」という本を鈴木さんは書かれていますね。

Su ええ、前に発行しましたね。

H 前編、後編ということで、内容の充実した大きな本が2冊あるんですけども……。で、そこ

に大正6年に「建築学校卒」というふうに記入してあるんですけども、これは工手学校の建築学科卒業ということですか？

Su ええ、工手学校のことです。

H 当時は、工手学校には、どんな方がおられたんですか？

Su 渡辺仁さんという先生、これは有名ですわね。

H 現在の国立博物館を設計された方ですね。どんな科目を教えられてたんですか？

Su あの方は、設計の図面の方でしたね。その他、有名な先生がたくさんいました。そういう先生連中がね、私が皇居の設計で、どうして、宮中のご用をおおせつかったのか、みんな不思議がっていましたね。わたくしは在学中に厨房専門の勉強をしたわけでもないんですね。直接指名になったということ、みんなびっくりしたんですね。

H 皇居の厨房を設計されたあとご研究の方が進んだのですか？ それともご研究のほうが進んで、その結果皇居の人に認められて、皇居の仕事をおおせつかったのですか。鈴木さんが厨房に興味をもたれたきっかけというのは何だったのですか。その当時は、台所設備なんていうのはあまり学校で習わなかったと思うのですが。

Su そうなんです。それというのはね、親父も建築ですけどね、私が親父のお手伝いで大森に100坪以上もある大きな家を建てていたんです。その時に、外人夫婦が毎日のように現場を見物に来たんですよ。建築に興味のある人だなと私は思っていたんですが、おぼつかない日本語でね、「家をこの近所に作る予定で土地を買ったんだ。」と話したんです。「ついては家を建てて、永住したい。家の設計をあなたに頼みたい」と。

H 鈴木さんに設計をお願いした訳ですか。

Su その西洋人が何で私に興味をもったかというところ、キッチンがね、日本の住宅ではほとんど無視されている。ところがあなたの設計図を見るとキッチンに重点をおいているように見えると言うんだ。これがアメリカの建築の要点だということなんです。

H この鈴木さんのご経歴を拝見致しますと、工手学校を卒業した2年後に米人技師について設備工学を修得されたとありますが。

Su それから後の第2の話になる……。

H 工手学校の時昼間はお父さんのお手伝いをされていて、夜、学校へ通われたんですね。

Su ええ、夜学ですからね。歩いて通学したもんです。

H そうすると、芝の二本榎の方から、ちょうど銀座を通過して築地まで行かれたわけですか？ どれ位時間がかかるものなんですか？ ご自宅から学校まで歩いて？

Su 足が速かったんですけどね。50分位かかりましたね。

H 毎日行き帰り50分づつというところかなり大変でしたね。

Su 労力です。それがもう慣れちゃって。持っているものは、まずT定規でしょ。三角定規とT定規を持って、それに勉強の道具。

H ノートとか鉛筆とか製図道具、そういうものですか。

Su ええ、製図道具。それを風呂敷に包んだものを背中にしょって、そうして行きと帰りを往復したんですけどね。まあ、昔の連中はわりかた原始的な勉強の仕方であるけれども、教える先生がまたね。渡辺仁さんやらね、きわめて旧式な考えで、それにまた日本建築、古代建築の先生にね、古宇田さんと言ったかな…、厳しい先生がいましたよ。

H 古宇田実さんのことですか？

Su そうでしたね確か。そんなふう勉強しているうちに、結局食生活を無視してね、住宅建築の設計はできない、できるはずはない、というふう気がついてきたんです。それがはじまりなんです。そして、台所の設計について一生懸命になる建築家がないということを見つけたんです。

H ご自分で考えられたんですか？

Su 考えたんです。それも日本に帰化して、永住しようとしたアメリカ人の住宅の設計をしてあげたことがはじまりなんです。

H それで、ずっと厨房設備の研究と勉強に入っていたわけですか。本なんかはどうされたんですか。

Su アメリカ人を通して手に入れました。そのアメリカ人が親切でね、いろんな本をプレゼントしてくれました。とにかくアメリカから取り寄せる時でも船ですからね。大変でした。

S 時間も大変かかるし……。

I アメリカ人のオーナーの方が資料を下すって、それで設計をしたりもしたんですか？

Su ええ、そうなんです。

H あの、資料をアメリカから取り寄せる時、どういう本があるかというのはどのように調べられたんですか？

Su その外人に調べてもらったりしたんです。

H そうすると外人の人がこういう本があるよというようなことで。

Su それを取り寄せて……。結局、自分がむこうへ行って探してきたのと同じような恵まれた環境にありました。

H 本当にそうですね。そのアメリカ人の方というのは随分建築にも詳しいのですか。

Su いや、そうでもないんです。

H 普通の素人の方ですか？

Su ええ、まったくの素人で、貿易商を商売にしていました。丸ビルのそばに三菱の事務所建築がたくさんあったんですけども、その中に事務所をかまえていた人なんです。ですから、日本語にも精通していて、私にとってはいろいろ便利なんです。日本があまりにも建築の設備に無関心だったので、日本で勉強してもこれからでも遅くはないからおおいに研究してくれ、専門的にやったらどうですというようなことを言われたんです。

H そうなんですか。それで専門的にやってみようか、とその道に進んでいった訳ですね。

Su ところが資料が日本にないから、先生一つ取り寄せて下さいということで、どれだけ取り寄せていただいたかわからないです。その方も手紙でアメリカへ連絡して、専門的な人から参考書を取り寄せてもらっていたのです。これが私の台所文化の知識吸収の上で大きな手がかりになった。

H そうですねえ。本も当然原書ですから、英語で書かれている訳ですね。

Su そうです。

H ご自分で翻訳をしながら読まれたんですか？

Su そうです。

H 大正9年ですか？ 鈴木商行創業とご経歴には書かれているんですが、それは、その後まもなくのことですか？

Su まもなくですね。

H それはどういった会社だったんですか？ 厨房設備を取り扱う会社として、鈴木商行を設立したんですか？

Su 鈴木商行というのは厨房設備の専門業者ということでした。

H その1年後位ですか？ 当時も随分話題にもなった大正平和博覧会の文化村に展示された住宅の台所を設計されたのは。

Su そうです。展示された文化住宅の台所は、全部文化台所で私がすべて設計しました。文化台所の設計は鈴木だというようなことで、結局、いい宣伝の機会にもなりました。

H 全部鈴木さんがやられたんですか？

Su 全部です。設計をしてそのとおりに作ろうと思ったら、それをつくれる業者がないんですねえ。また台所の専門家もなくて、建築学会から「鈴木くんに全部たのむよ」ということでのまれたんです。全部で25～6軒ありましたかねえ。

H 昔の本を見てもかなりのってますよね。文化住宅は。

Su 写真が残ってますかね。みんな建築学会の仕事としてやったんです。建築学会を経て台所設備に賞をもらいました。それというのは、運が良かったんだね。皇后陛下がね、見にこられたんです。文化村に。どの住宅にも同じような新しい台所の設備が並んでいるから、それでそのことについてお聞きになったんですね。それで、建築学会で文化台所について皇后陛下に説明をしたんですね。

H それが良かったわけですね。もちろん台所設備としても、ご立派なものをつくられたから当然賞はいただけたんでしょうけど。

Su 文化住宅の台所では、大体一間の長さを標準にしたんです。間口一間。高さは2尺6寸、奥行きは1尺8寸、そしてその中にシンクを中心に調理台、その他には七輪をのせる台。

H 七輪ですか？

Su そう七輪。まだガスレンジにならないうちですから。便利で危険でないように、安全に操作できるように組立てました。で、下の方には道具あるいは材料を入れるところ、食べもの、野菜や魚

にしても、それがくさらないように都合よくしまえるように工夫しました。

H 1間の長さの中にそういうものを入れたんですか？

Su ええ、1間の所に……。20数軒、どの家にも同じセットをおきました。

H 当時は、ステンレスなんてなかったと思うんですけど、どんな材料でつくったのですか？

Su 銅板。

H 銅板をはって……。そうすると下地は木か何かで作って、仕上げに銅板をはられた。

Su しかし、その中の中心のシンクだけはホウロウ鉄器ということにしたんです。鉄板に焼きつけて、これは日本で初めてだったんです。月島の工場で作らせたんですけどね。

H そうなですか。

Su 特約しましてね。つくらせたんです。図面をもって行って、説明しながらでした。

H 随分いろいろご苦労があったんでしょうね。

Su そうしたような便利な台所がそろわないと文化住宅にならないということで、建築学会からも非常に喜ばれました。台所が重要だということに建築学会も気づいたんですね。

H 先ほど、台所の流しの高さが2尺6寸と言われましたね。それはどういうふうなところから決められたのですか？

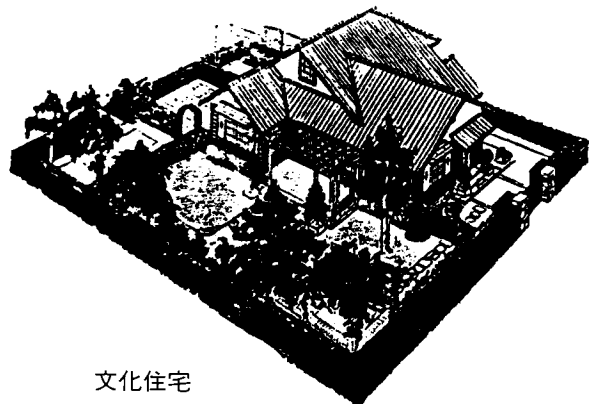
Su へそから。

H あっ、おへそまでが2尺6寸だから、それで高さを決めたとですか。

Su それを標準にしたんです。

H それは、外国製のものよりいくらか低いんですか？

Su 低いんです。



文化住宅



H それは、日本人の体型に合わせて……。

Su ええ、そうです。日本人の体型に合わせて便利なようにと、台所というのは、ただ立っているだけのものじゃないから。作業もしないといけない。そういう動作を考えて設計しました。

H そういったことはアメリカの本を参考にされて考えたのですか？

Su ええ、それを日本式に直したんです。アメリカのは高いですからねえ。高い方が実は便利な点もあるんですが。日本人の台所での作業も今と少し違っていましたね。

H アメリカのどんな本を参考にされたかは分かりませんか？ 本の名前とか。

Su そうですね。日本式に言うと、専門の雑誌というのがなかったもんで、家庭の参考資料になるようなものでした。

H 普通の主婦が見るような本ですか。

Su ええ、そうです。でも比較的、専門的な内容がのっていましたね。写真とか、設計の図面とか。写真も相当あったんです。それに想像力をはたらかせて自分なりに考えました。そんなことから、これはアメリカで本物を見なきゃならないということで、アメリカに行きたいという意欲がわいてきたんです。そうしたら、その通りだと言って先のアメリカ人が賛成してくれたんです。

H むこうに行かれたのは……。それは、文化村の住宅の後ですか？

Su 終わってまもなくですかね。

H アメリカでは、どんな所をまわられたんですか？

Su バスで、住宅、それと工場、職場、レストラン、どこでも見てきました。

H 見せてもらうというのは実際には大変だと思うんですけども、向こうで世話してくれた方が誰かいるんですか？ それとも、行き当たりばったりで……。

Su ええ、行き当たりばったり。

H アメリカへは当時横浜から船で、行くわけですね。

Su ええ、ひと月かかりましたね。ハワイ経由でね、サンフランシスコへ着くの。

I アメリカの都市はどこへ行かれましたか？

Su ええ、まず西海岸のサンフランシスコ。旅行のプランはね、東京におる時にたてて、そのスケジュールに合わせて回ったんです。費用はね、ド

ルでもってね、東京ですっかり整えて行きました。

H 当時は今みたいに海外旅行が気楽に行ける時代じゃあないんで、大変だったと思うんですけど……。

Su 厄介だったねえ。大変でね。パスポートをなかなかとれないんですよ。どういうわけでアメリカへ行くのかと細かい所まで聞かれるんです。説明してもすぐに理解してくれないんですよ。

H 日本で外貨獲得にきゅうきゅうしている時代で、せっかく獲得した外貨をまたむこうで使われるという意識があったんでしょね。

Su 後援してくれたアメリカの夫婦が、非常に便宜をはかってくれたんです。

H 貿易商の……？

Su ええ、貿易商の。

I サンフランシスコ以外にはどこを回られました。

Su シカゴ、それからワシントン、ニューヨークね、イーストの方もひととおり回った。会話が大変でね。一生懸命勉強したんですが。

H お1人で行かれたんですね。

Su ええ、1人です。

H 東海岸へは鉄道で回られたんですか？ それとも飛行機か何かで？

Su 鉄道です。だから大陸横断するのに、まずひと月かかった。

H サンフランシスコから直接、ニューヨークに行かれたんですか？

Su いや、いや、ロサンジェルスなんかの西海岸をひととおり回って、それからだんだん奥へ入っていったんです。

H じゃあ、ほとんど1周されたわけですね。それで、又、サンフランシスコからハワイ経由で日本の横浜にもどられた。

Su そうです。それで行きと帰りに会ってハワイで仲良くなった日本人もいます。自分より年上だけれども。

H その方は、建築家か何か……。

Su いやいや。ハワイで世話になったんです。「ホテルは高いから私の家に泊まりなさい」って泊めてくれました。和歌山県出身だった。

H むこうでアメリカをずっと回られている時に、資料を集めるのに、例えば今ですと簡単にカメラを持って行って写真をとってくださることができずが。

Su カメラを持ってないのでスケッチとメモをとっ

てきました。いろいろ文句を付けたしてね、記録を作ったんです。

H そういう資料は今、お持ちですか？

Su ありませんね。

H あると非常におもしろいんですがね。

Su 震災で家もみんな焼けちゃいましたからね。二本榎。東京の芝で震災にあったわけです。

H 関東大震災のあとで生活改善のいろんなことをされてますね。ご経歴を拝見すると、昭和4年に生活改善中央会関係台所改善協会理事長就任というのがありますね。

Su そういう経歴が出てくるのはね、日本女子大学に関係してくるんです。日本女子大学で、つまり文化生活ということを課題にした教育があるんですけれども、その中で生活の中で改善すべきものとして台所がまず第一にあげられたんです。

H 日本女子大学で講義か講演をされたんですか。

Su ええ、毎週曜日を決めて講義をしました。

H それは、いつ頃なんでしょう？ 先程の理事長就任の前ですか。

Su ええ、その前です。アメリカから帰ってからしばらくたった後に建築学会などから人かどの知識者という風に認められて、そんなこともあり、頼まれて女子大学に行ったなあ。

H じゃあ、今までいろいろ台所やなにかで、ご研究されてきた成果を講義された訳ですね。そういったことを通して生活改善の理事長になられた訳ですか。

Su ええ、まあ理事長にされたんです。なぜかという、建築の知識があるから便利なんです。生活改善で引っぱり出されて余儀なく日本全国を回って歩いたんだけど、相当旅費がかかった。台所まで気付いた建築家がまだいなかったね。構造上とか、外観上の美観ということは建築家は考えていましたが、私のような人間はいなかった。

H また、そこに気が付かれた所に鈴木さんの偉さがあるんでしょうけれども。

Su おおいにおだててくれたというわけではないけれど、奨励してくれたのが先ほどのアメリカ人。そうそう、ハイウッドという名前でした。

H 生活改善中央会関係台所改善協会理事長として全国各地を歩かれた訳ですが、それは具体的にはどのあたりですか。

Su ええ、それはね、東京の女子栄養大学というのが振りだしなんですけど、そこで東京都、その

頃東京市で、市内のあっちこっちに市立の女学校がある。その女学校で家庭科の時間に台所の動作とか文化台所について話をしたのです。

H その後、地方の都市にも行かれたのですね。

Su ええ、ひっぱり出されたんです。

H それで講演をしてずっと回られた訳ですね。

Su ええ講演をずっと。大変な数ですよ。各府県に少なくとも2つや3つはあるんですから。

S 高等女学校の数ですね。

H じゃあ各地へ行って高等女学校とかで講演されて歩いたんですか。

Su ええ、大体が学校の校舎で行いました。

H 地方へ行くとも随分喜ばれたと思うんですけども……。

Su ええ、喜んだのが学生ばかりでなく奥さん連中。主婦連中です。

H じゃあ主婦の方も講演を聞きにこられて……。

Su もちろん講義を聞きにきて。それが一つの県に1カ所か2カ所でもいいかと思った所がなかなかそうはいかないんです。あっちでもこっちでも呼ばれて。それで旅館の都合もあるからと言うと、豪農というかその土地の富豪の連中が招待をするんです。

H 是非こちらへ来て話してくれというように……。

Su ええ、あっちこちね。こっちは費用は使わないでね。まあ引っぱり回されて。「そんなこといい気になってはいけませんよ」と、誰れだかに言われたかな。行かないのは北海道の奥の方だけです。

H 北海道から九州まで行かれた訳ですか。経歴書によりますと、その後アメリカとカナダ、今度はカナダも含めてですけども渡られたんですね。

Su ええ、行ったんです。

H むこうでいろいろとご研究とか調べものをされてきた訳ですか。

Su ええ、そうです。

H 今度はどういったことを中心に調べられたんですか？

Su 今度は家庭の台所から離れて業務用というスケールの大きい設計知識が日本にも必要になってきたので、そういったものとか、キッチンの工業化なんかを勉強に行ったわけです。

H その頃ですか？ 日本の古い台所なんかについても調べ始められたのは。

Su まずね、京都御所から始めてそれとね幕府や

大名の城郭。それから大名の邸。少しレベルを落とすというサムライ屋敷の台所と、それから町方のものも調べました。

H 町方の方も調べられて……。

Su そうような昔の台所を研究して何んの役に立つかと思うだろうけど、ところが古いものも参考にしないと前進しない。だから古いことも知ってなきゃならないということになったわけですね。

H あっ、そういった関係から宮内庁の仕事にも関わるようになったのですね。

Su 当時は宮内省。

H 昭和12年に宮内省の嘱託になられてますね。東宮仮御所台所、大台所設計拝命とご経歴に記されてますね。

Su ええ、そうなんです。それというのは、建築学会に問い合わせても、台所設備の設計をする専門の技師が日本にはいないと言って。

H じゃあ、鈴木さんとこに行けば分かるというふうなことで……。

Su 私をどっちが先に知ったかという、宮内省関係の奥さんの方が先に知ったんですね。

H 鈴木さんをですか。それは本とか何かを見られてですか。

Su そうなのか、ちょっとわからないですね。それで私が呼ばれて宮内省に行った訳です。そこで私が、宮内省にはその台盤所の知識者がいるはずだと言いましたら、それがいないと言うんだ。内匠寮で建築の方は設計をしているけども、台所の設計は専門家がいないから良いものが出来ない。

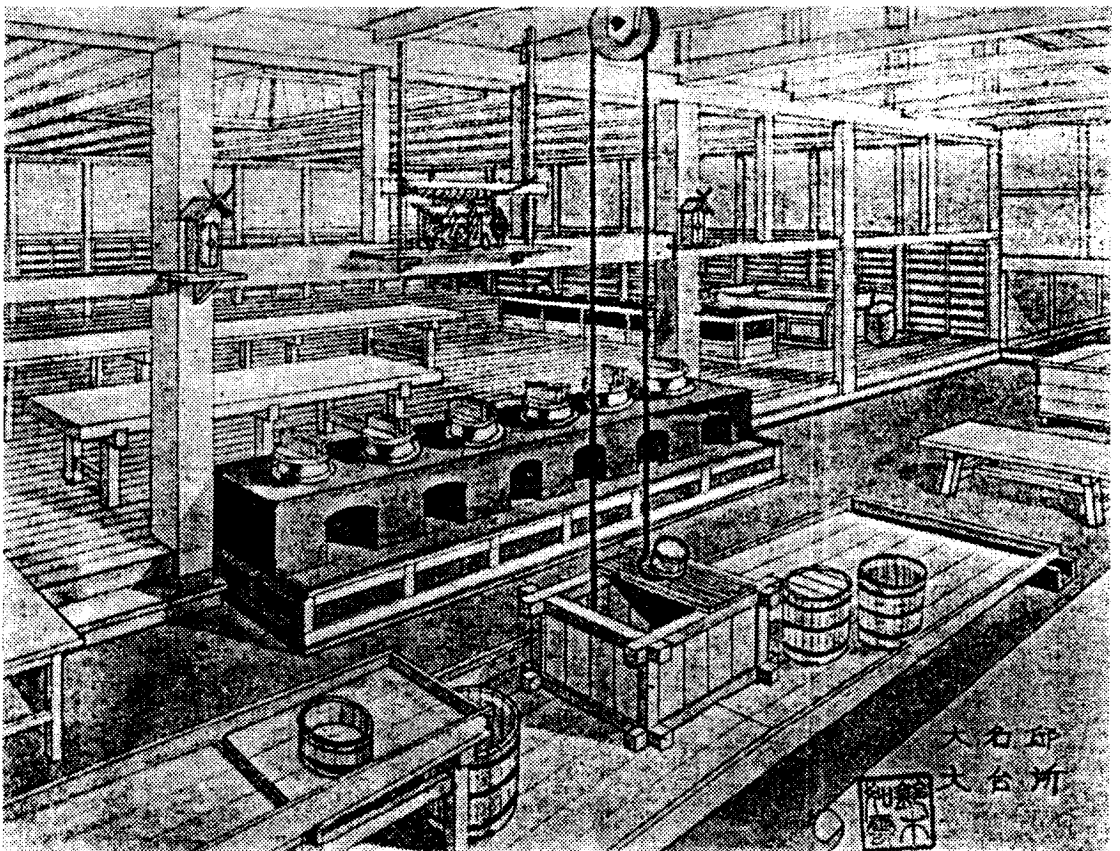
H で、是非頼みたいというような……。

Su かたちになってきたのが宮内省御用という看板。

H 東宮仮御所の台所を設計された時のご苦心した点とか工夫した点について何かありますか？

Su ええ、流し台の使い方が民間の一般の使い方

百万石大名屋敷の大台所の図



と宮中とで違うんですよね。それは古く歴史的にさかのぼらないと分からないんです。それを現代的になおす必要があるとなってきたのです。東宮、いまの皇后陛下が東宮御所の東宮さんになられた時に青山の地に東宮仮御所をつくったんですね。仮御所というのは、お子さんの御所なんです。檜造りで立派なものでした。それでね、苦勞したというのはね、とにかく旧態依然たる御所建築ですからね、それに合うような台盤所の設計せにやあならん。

H 古いものという点でそれまでの鈴木さんのご研究が役に立ったんですね。その設計というのは、古いものと新しいものを混ぜた形式の台盤所だったんですか。

Su ということになるんですね。それで大変に便利だと言うことを皇太后陛下がお認めになった。

I 大正天皇の奥様ですね。

Su そうそう。そこでね。呼ばれてね、ご苦勞様でしたということていろいろいただきました。まず賞状をげしされて、そして紋付羽織の生地。それに着物地と袴地。羽織地には私の紋がわかんなかったから紋を染ぬいて下さいということでした。それらをおりに入れた賜物をいただいた。それに金一封をそえて……。

H なかなか頂戴できないものなんでしょうね。

Su そういう拝領ものはめったになかったね。鈴木君は運がいいって皆にほめられた。

H あの、昔の形式が東宮御所の台盤所に必要だったというのは、どういった点ですか？

Su それはね、立ってする作業ばかりでなく、昔ながらの座って仕事をすることもあるんですね。

H 台盤所ですか？

Su そうです。台盤所という古い形式のと、新しい洋風の台所というか、新しい時代にあったものもつくったんです。それがつまり近代台所ということになるんでしょうね。

H 古い形式と新しい形式をまぜあわせて、一つの形式をつくったということですか？

Su ええ。そんなことをやっているうちに、台所で立ったり、しゃがんだりしないで立ったまま体や手足を動かして作業できる方式を開発したんです。「高等炊事台」という名称をつけたんです。

H それは特許が何か取られたんですか？

Su いえ、特許になる性質でないので実用新案。役所に届けを出したらすぐ登録されたんです。7カ

月しかたないうちに登録されたんです。こんなことはめずらしいんですね。類例がないから、だからただちに登録されたって。類例があるのは半年どころか、2年、3年といった期間が必要になる。

H ご本によりますと、京都御所で古い台所の形式を調べられたようですが、その他にはどんなことを調べられたんでしょうか？

Su 桂離宮とか、伊勢神宮も調べました。内宮さんはもちろん大切だけれども、伊勢に参宮したかったらば、本当は、少なくとも技術系の知識者はね外宮さんをお参りするんです。で例えば塩なら塩。塩を研究しようと思ったら塩の神様。その塩の神様はどういう方法でお祀りしてあって、どういう指導方法を昔から教えているかということが分かるんです。それから火ね、すべて神様事にしてはあるけれども、そこには科学性もあるわけですね。水と火とは違うと。火はこういふ。水はかくかく。文化的に説明をするにしても、実に説明しやすいんです。

H そうすると伊勢神宮では相当期間をかけて泊まりこんだり何かされて調べられたんですか。

Su 神宮支庁を旅館としてね、ご馳走になったりね、世話になったりして。それというのは、今まで、君みみたいな研究者は、1人も出てこなかったって。君が初めてだって。内宮司さんが北条という子爵なんですがね、非常にめんどろを見てくれてね。

H そういふ知識が、東宮仮御所の台盤所を設計する時に役立った訳ですね。

Su ええ、応用するわけですね。ですから、普通の建築技師と違って、そうしたご先祖の知識をね、年代的に翻訳してね、文化を進める手がかりにした。つまりこれが設計というものと解釈してきました。

I 東宮御所では、普段の食事もその厨房で作るんですか？

Su ええ、それは当然です。

I そうですか。いや儀式の時だけかと思った。

Su 皇太后陛下、あ、皇后陛下か。皇后陛下がね、やはりご婦人で、自分で料理をやりたいんだね。

H はあ、ご自分で。

Su 自分でね。煮物、焼きもの、そうした調理の手なぐさみです。そこではやはり立ち居振る舞いことごとく現代的に設備する必要があった。そこではどういふふうにご操作するというようなことを科学的に分析して設計をしている。それから大規

模となると、何人もの食の準備を出来るだけの設備をする。それでも科学的にこういうようなものを配置するというようなことになるわけです。しかし、神秘的というか、火の神様はどうか、水の神様はどうかといったことも考えなければいけない。その区分けがそれまでつかなかったんですよ。その区分けを私がしたわけです。それで参考にしたのは、明治維新に廃止になった京都御所。残っているのはね井戸屋形だけなんだけどね。13カ所。屋形だけは残っている。

H ええ、そのあと、ずっーと軍隊の方に所属されていますね。

Su ええ、そう。大東亜戦争になってから。軍属として南のほうにいました。

H そうすると鈴木商行という会社の方はどうされたんですか？

Su 会社の方は、一応表面的には閉鎖です。

H 戦後帰られて昭和25年に鈴木商行の再建ですね。再建した時には非常に大変だったと思うんですけども……。

Su ええ、新規まき直しですからね。

H 経歴書によりますと、戦後もいろいろな役職に就任されているんですけど、例えば厨房設備協和会設立理事長ですか？ 設立されて理事長になられたとありますね。

Su それはね、協和会というのは業界という意味なんです。業者と業者。

H 厨房の設計業者ですか？

Su 設計ではなく、設備業者。

H 今のが、昭和31年でその翌年の32年に全日本厨房設計監理協会創立会長就任とありますね。これは設計の方ですか？

Su ええ、設計の方。

H また、その1年あと34年に東宮御所の厨房設計拝命とありますね。この東宮御所というのは？

Su 新しくできた御所。前は仮御所だったから、今度は本物のね。

I やはり青山に作ったんですね。

H 前回、昭和12年に仮御所の台所設計をされているわけですが、戦後の34年になると前と同じ台所というわけにはもちろんいかないでしょうね。どういった点が、変わったんですか？ 戦後になりますと。

Su そうですね。簡単にいうと機能性が高まってきた。設計の方針において、機能性が。

I やっぱり、伝統的な要素も含まれているんですか？

Su ええ、伝統的の欠くべからざるものは、保存しなきゃあならん。それから、また、東洋と西洋とによる相違。和食と洋食ね。その作る作り方が違うでしょ。作り方、作業の方法に合わせて設備をそろえてね。

H 戦前の時もやはり和食と洋食に合わせるということはあるんでしょうか？

Su ええ、それはあったんです。

H 台所設備なんかも和食の所と洋食の所をつくっていたんですか。

Su ええ、そうせざるを得ないんです。

H で、より戦後になるとそういうものがより機能化されて……。

Su ええ、機能化してきた。

H 戦前の東宮御所なんかも、電気冷蔵庫は入っていたんですか？

Su ないです。

H なかったんですか。

Su それは輸入しなかったんです。

I じゃあ氷の冷蔵庫だったんですか？

Su アイスボックス。アイスボックスという体裁はいいけれど……。

H 相当大きなアイスボックスだったんですか？

Su それはね、アイスボックスといってもピンからキリまででね、一棟そっくり冷凍庫なんです。ええ、だから冷凍庫の作り方、氷の保存の方法とかね、あるわけですね。それは科学的に処理しなくちゃあならない。そういうことをやはり指導するんです。設計図を作るのは他の人で、作業の人間。その作業をさせる上で指導するんだね。これが本当の意味の計画設計っていうやつだね。

H あの、また戦前の話になって申し訳けないんですけども、戦前の仮御所の台盤所では、1つの建物が冷凍庫だというお話をお伺いしたんですけど、その他、ガスとか電気なんていうのはどうだったのですか。

Su ええ、ガス・電気はもちろん使ったんです。

H ご飯を焚くのは何で焚いたんですか？

Su ガス釜。ガスでね。

I ぼくは薪でご飯を焚いたのかと思ってたけど。そうじゃないんです。

H じゃあガスレンジなんかも入っていたんですか。

Su 入ってたね。

H 電気なんかはどうなんです。当時は照明だけでですか？

Su いやいや、一部ね、電熱といものを採用した。

H どんな部分ですか？ それは。

Su いやガスを燃やしてご飯を焚いたり煮のと同じに、電熱でそれを行った。つまり電気コンロよ。

H ああそうなんです。そうすると戦後の東宮御所なんかは当然電気なんかがふんだんに使われたんですね。

Su ええ、もちろん。冷蔵庫なんかも当然大きな電気冷蔵庫。結局燃料が進歩したからね。もうまるっきり観念が違うんですわ。

H そうですね。昭和35年に、キッチン文化協会副会長に就任していますね。この時にやはりキッチン文化協会というのも作られたんですか？

Su ええ、この時に文化協会をつくった。

H そうなんです。で、先程からちょっと開いていろいろご経歴を見せて頂いているこの「台所文化史」の前編・後編2冊の本が、同じ35年に出版されてますね。

Su この本は前半が歴史で、歴史とか古いものをはじめ理論的なものがある程度おいて、後編がわりと実用的にも使えるというようなことで分けているんです。

H 普通学者ですと、理論的なものはやるけれども、実際面には疎いとか。実際にやる人は理論的なのはなかなかまとめきれない。それを両方同時にやられたのが鈴木さんの偉さであり、それが各分野で認められた所じゃないかなというふうに思うんですけれども。今日は長い時間本当にありがとうございました。後輩にとってとても良い刺激になりました。(おわり)

#### 著者略歴

明治33年	10月3日生
大正6年	工手学校建築学科卒業建築設計事務所勤務
大正8年	米人技師から欧米台所設備工学勉強
大正9年	実用新案鈴木式炊事台創作 鈴木商行創業
大正10年	平和博覧会全文化村文化台所設計並に出品受賞
自大正12年	文部省依嘱日本赤十字社・府県学務部主催台所改善運動講師
至昭和4年	生活改善中央会関係台所改善協会理事長就任
昭和4年	
昭和5年	渡米加、キッチンサイエンス及び各種厨房の研究
昭和6年	米国務省より受賞
昭和12年	宮内省嘱託(無給) 東宮御所大台所設計拝命
昭和17年	陸軍技師拝命南方軍政監部員(内閣辞令)
昭和25年	株式会社鈴木商行再建
昭和31年	厨房設備協和会設立理事長就任
昭和32年	全日本厨房設計監理協会創立会長就任
昭和33年	日本工業規格専門委員会会長就任(通産省辞令)
昭和34年	東京御所厨房設計拝命宮内庁嘱託(無給)
著書	文化人の常識 台所文化史

聞き手 篠原梅吉(昭和6年卒業)  
初田 亨(昭和44年卒業)  
岩田俊二(昭和46年卒業)  
平成元年12月17日 鈴木氏宅にて収録



# いま、木造（在来軸組構法）住宅は……？

工学院大学助手 大塚 毅

今、木造住宅は、いろいろな点で急激な変化をしようとしています。特に注目されているものに次のような問題があります。

1. 接合部の簡略化と補強金物の使用
2. 耐力壁の面材化と耐力
3. 床の振動と振動感覚及び評価法
4. 騒音と吸音・遮音対策及び評価法

第一の接合部簡略化の傾向は、良質な国産材の不足により外材依存度を高め、微妙に異なる木質は繊細かつ大胆な細工に適しない事や優秀な技能者の高齢化と後継者不足に伴う技能者不足と技能の低下で加工に支障をきたす様になった事が大きい。また道具の発達・補強金物の開発や木の特性を無視して強度のみを追及したところにも責任があると思います。最近多くなった接合部の弛みや擦れの問題は、金物と突き付けに近い接合部の木や金物の収縮・膨脹による狂いが吸収されないためです。昔の工人が木を熟知し、数百年に及ぶ経験の積み重ねと工夫から生まれた仕口や継手は、材料力学的にも、幾何学的にも理に適った芸術品と言えるまでに完成した素晴らしいものです。この技術と伝統は、模型や写真で残すのではなく、実際に使用した形で伝承しなければなりません。

そして金物は、木や仕口・継手を十二分に活かす補強金物（あくまでも補強）であって欲しいが、この分野の研究は非常に少ないのです。

第二の耐力壁の面材化は、手間と工期の短縮など施行性の工場も大きなメリットですが、水平剛性を増大させて在来軸組構法の弱点を補うのが最大の理由です。実大実験で確かめましょう。

【静的加力実験】 図-2は、写真-1と図-1に示すような（ほぼ住宅金融公庫仕様の）木造2階建軸組構法に水平変位角 $1/600 \text{ rad}$ を与えた時、「建設段階の水平剛性がどのように推移するか」をグラフに表したものです。（試験体は完成するまでを十段階に分け、付加した部材を名称とする。以下では例えば火打とは部材と火打まで付加した

試験体の二つが混在するが、文脈から区別して載きたい。）

筋違と壁は、他の部材より急勾配で剛性の高さが理解出来ませんが、特に合板壁は、筋違の4.5倍と大きい。（木摺壁は、1.7倍です。）

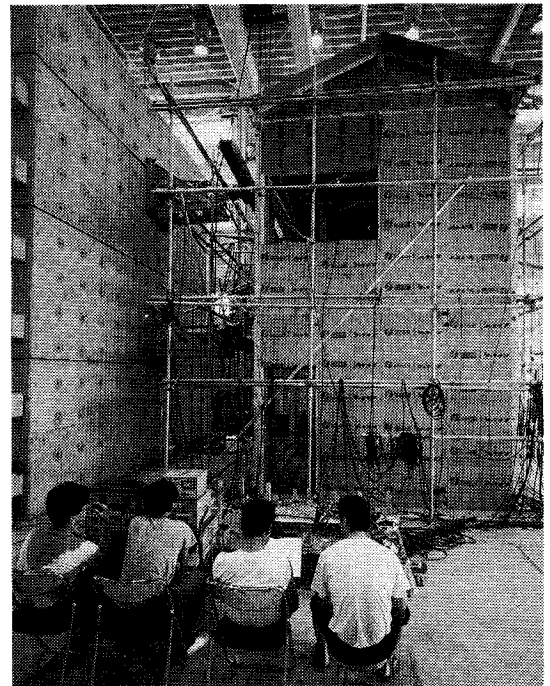


写真-1 試験体と実験状況

表-1は、部材別の剪断力を示し、表-2は、この剪断力と式(1)から求めた部材単位長当りの剪断力を示します。但し、水平変位角 $1/60 \text{ rad}$ の剪断力は同平面の別試験体から得られた値です。「小規模住宅の新施行法の開発」の文献によると、 $1/600 \text{ rad}$ の剪断力（ $Q_{1/600}$ ）=300kg、最大剪断力（ $Q_{\max}$ ）=890kgと報告されていますが、各々86%、98%と良い一致を示しています。単位部材当り剪断力は火打、木摺壁、間柱・筋違、合板壁の順に大きくなっていますが、他の部材は期待出来ません。（但し、火打の耐力は必要以上挿入してもあま

り増加せず、全耐力の4～6%程度です。) 実験から得られた木摺壁と合板壁の壁倍率は、各々0.79, 6.71で安全率を1.5とすると、各々0.52, 4.47各々0.52, 4.47となり、前者は建築基準法の値と一致しますが、後者は建設省告示の1.7倍と大きい。これは柱に30mmの「板ジャクリ」を設け合板の擦れを拘束したことも影響しています。

$$16.56 D + 6 S + 3 H + 14.08 N + 14.08 U + 4 G + 16.56 Y = P \dots\dots(1)$$

但しD：軸組 S：間柱・筋違 H：火打  
N：根太 U：床 G：壁 Y：屋根  
P：水平耐力

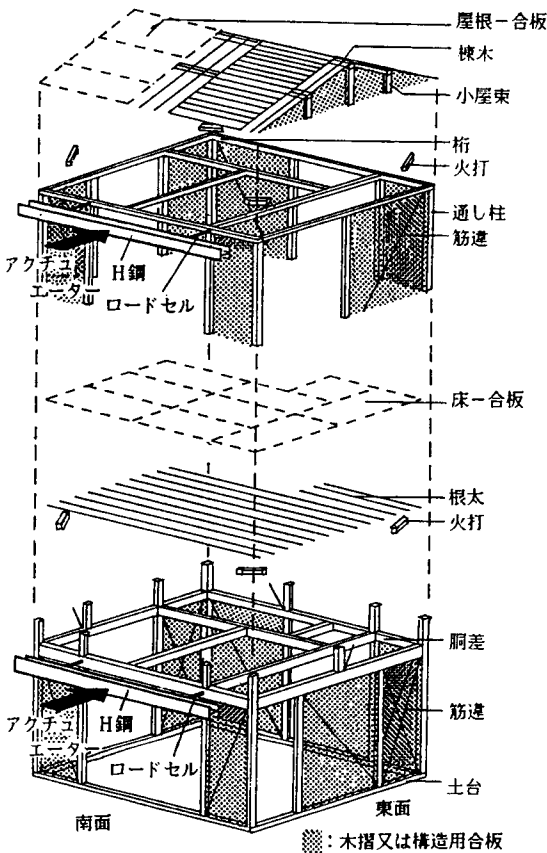


図-1 試験体軸組図

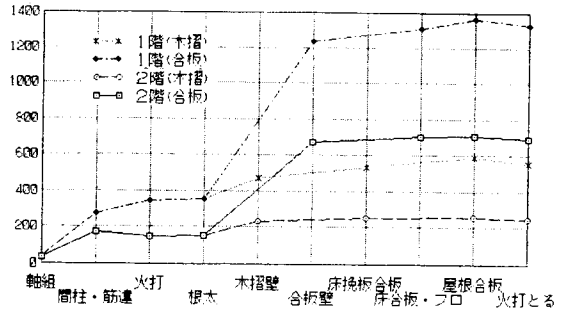


図-2 建設段階別水平剛性増減の推移

また、表-3は、水平力を部位別分担率で表していますが、建物の抵抗分担は耐力壁の固さで大きく支配され、剛性の高い合板壁では壁が82%(その内合板壁は76%)を分担し、木摺壁の66%(木摺壁は52%)と差は大きい。逆の見方をすると、木摺壁の建物は全部材をうまく利用して合板壁の建物より部材応力の均等化を計っていると言えますが、建物の耐力は低く、破壊すると被害は建物全体に及ぶ危険性がある。木摺壁の建物は耐力向上を、合板壁の建物は部位剛性のバランスを計って最適な構造設計を考えなければなりません。

【動的実験】 表-4は、同試験体の小屋梁中央に起振機(起振モーメント4kg・cm, 最大起振力100kgf)を設置して強制振動を与え、建設段階別の動的特性を調べたものです。数年前は0.3～0.7秒と長かった1次固有周期は、木摺・合板壁共ほぼ同値の0.16秒と短く、木造の剛性増大の構造的変化が見て取れます。それに伴って減衰定数は10%から4～5%と小さくなっている。これ等の値は、ツーバイフォー工法や一部の鉄筋コンクリート造・鉄骨造住宅に近い特性を示し、地震などにも以前の木造と異なった振動応答が予想された。

また、表-5は、2階建を一質点系に置換して、固有振動数とバネ系の関係式(2)と筋違とバネ定数との関係(筋違=110kg/cm)から求めたバネ定数と壁倍率です。静的実験結果の倍率と比較すると2～3倍大きい値を示していますが、定量的な倍率が得られれば、起振機の強制振動による非破壊実験で建物の特性や耐力推定及び構造計算の確証などが可能となり、木構造の性能評価に有力な試験となるでしょう(今後の課題です)。



表-1 部材別の剪断力(kg)

	1階押	1階引	2階押	2階引
軸組	38	38	34	30
間柱・筋違	78	79	137	143
火打(木製)	73	34	-25	-35
根太	7	-5	6	5
壁木摺	278	302	82	76
壁合板	1036	870	522	377
床挽板・合板	64	122	19	102
床合板	79	127	26	93
屋根合板	53	88	6	34
火打とる	-37	-61	-13	-43

表-2 単位当り部材剪断力

	1/600rad	1/60rad
軸組	2.3	7.7
(1m <sup>2</sup> )	0.02	0.06
間柱・筋違	39.0	43.8
(0.91m <sup>2</sup> )	0.30	0.34
火打(木製)	24.3	82.0
(1本)	0.19	0.63
根太	0.5	1.7
(1m <sup>2</sup> )	0.00	0.01
壁木摺	30.5	102.6
(0.91m <sup>2</sup> )	0.23	0.79
壁合板	259.0	872.0
(0.91m <sup>2</sup> )	1.99	6.71
床挽板・合板	4.1	13.8
(1m <sup>2</sup> )	0.03	0.11
床合板	5.6	18.9
(1m <sup>2</sup> )	0.04	0.15
屋根合板	3.2	10.8
(1m <sup>2</sup> )	0.02	0.08

下段は壁倍率

表-3 部位別水平分担率

	木摺		合板	
軸組	7.06		2.79	
間柱・筋違	14.5	5.72		
壁板種類	51.67	66.17	75.95	81.67
火打	13.57	5.35		
根太	1.30	0.51		
床板種類	11.90	26.77	5.79	11.65
屋根種類	---		3.89	

木摺：壁木摺+床合板+壁合板  
合板：壁合板+床合板+床合板

表-6 木摺壁と合板壁の特性値

壁種別	在来軸組構法	
項目	壁木摺	壁合板
床のたわみ	1.38 mm	
1mm変位耐力	107 kg	259 kg
層剪断力	1925 kg	4621 kg
耐力壁の分担率	52 %	76 %
風荷重風速	38 m/sec	80 m/sec
固有周期一次	---	0.164sec
減衰定数	5.0 %	6.1 %
振幅	0.17 mm	0.09 mm
最大震度	642 gal	1347 gal

表-4 建設段階別動特性

項目	振幅 (mm)	加速度 (g)	固有振動数 (Hz)			減衰定数 (%)
			1次	2次	3次	
試験体タイプ						
軸組	0.41	0.062	4.16	9.37	12.15	6.1
	0.17	0.030	4.18	7.30	12.01	6.9
間柱・筋違	0.35	0.026	4.19	7.91	12.00	5.5
	0.17	0.030	4.20	8.19	13.12	4.4
火打 木製	0.27	0.029	4.20	8.51	11.39	5.1
	0.13	0.007	4.21	9.23	11.68	3.5
根太	0.22	0.015	4.29	7.57	8.72	7.0
	0.10	0.005	4.22	7.63	9.96	8.6
壁木摺	0.17	0.009	4.85	9.44	10.60	5.0
	0.10	0.022	4.68	9.18	10.42	1.4
壁合板	0.09	0.044	5.95	9.42	13.62	3.7
	0.07	0.033	6.41	12.02	13.67	4.8
床挽板合板	0.09	0.029	6.08	9.31	13.97	6.1
	0.07	0.036	6.40	11.89	14.82	4.1
床合板フロア	0.08	0.039	6.14	9.29	12.12	4.4
	0.06	0.025	6.40	12.08	---	4.1
屋根合板	0.08	0.039	6.18	9.16	12.46	3.7
	0.05	0.032	6.51	11.89	---	3.2
火打とる	0.09	0.033	5.85	6.72	8.94	6.3
	0.06	0.038	6.22	12.02	---	3.4

上段：桁行方向 下段：梁間方向

- ① 振幅・加速度：起振方向一次固有振動数の平均値
- ② 固有振動数：n次の平均値
- ③ 減衰定数： $h = \log_e(X_1/X_{1-n}) / \pi$  で求めた平均値

表-5 動の実験から求めたバネ定数と壁倍率

項目	バネ定数壁倍率	
	kg/cm	軸引
試験体タイプ		
軸組	1607	4.09
	1621	4.13
間柱・筋違	21	0.46
	16	0.36
火打 木製	9	0.13
	7	0.10
根太	71	0.21
	7	0.02
壁木摺	478	5.05
	383	3.24
壁合板	1587	16.75
	2175	18.35
床挽板合板	1256	3.79
	1779	5.36
床合板フロア	1324	3.97
	1779	5.33
屋根合板	113	0.29
	132	0.34

上段：桁行方向

下段：梁間方向

軸、根太、床、屋根(1m<sup>2</sup>)  
筋違、壁(0.91m<sup>2</sup>) 畑(1本)

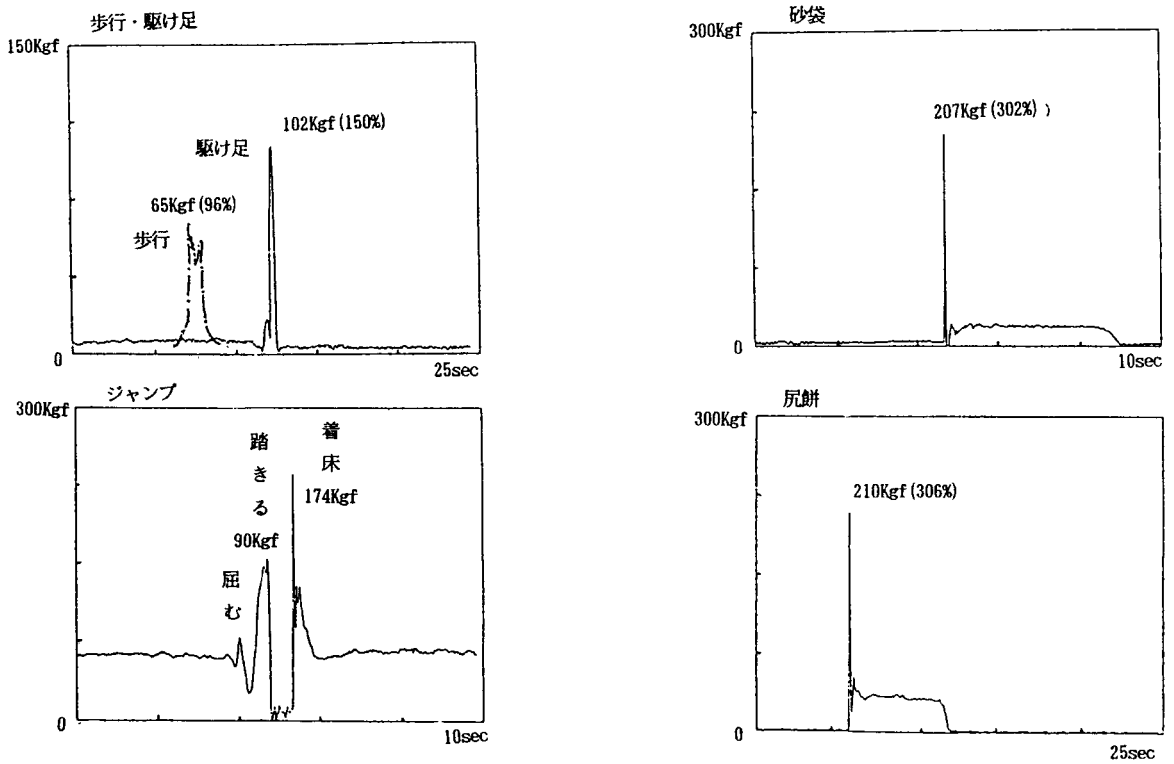


図-3 動作の衝撃力の時間変化

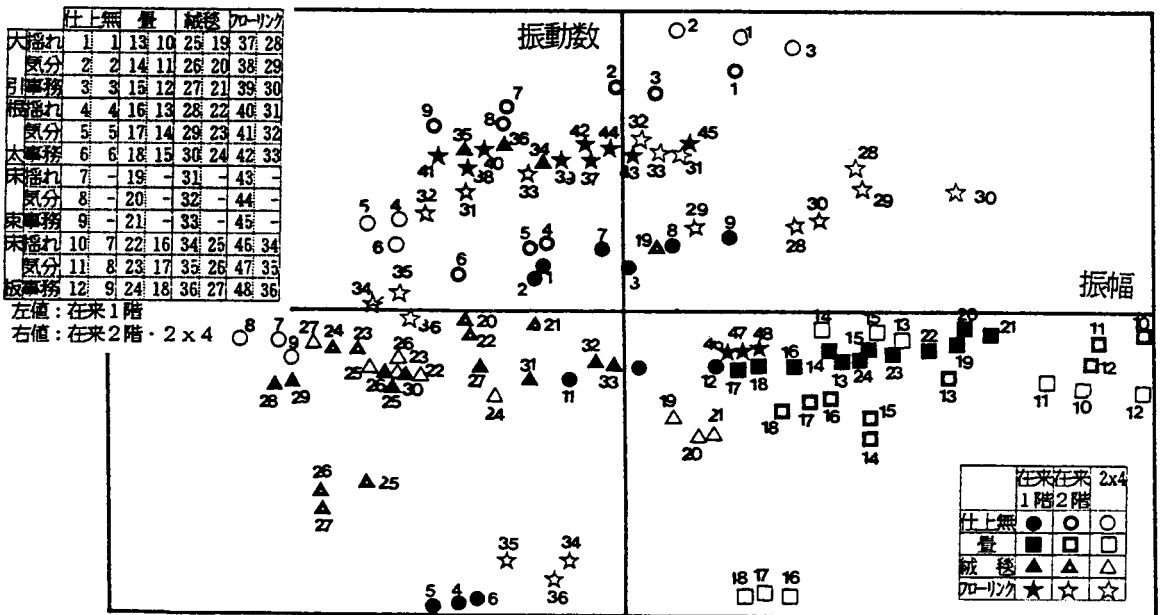


図-4 主成分分析の一例

$$K/m = (2\pi f)^2 \dots\dots\dots(2)$$

但し m : 質量 K : バネ定数 f : 固有振動数  
以上、実験値から従来軸組構法の壁材による構造特性の違いを述べました。

しかし、実際の建物では、この試験体のような特異な平面でなく剛性バランスが良いため、実験値以上の性能が期待出来ます。

表-6は、木摺壁と合板壁の主な特性値をまとめたものですが、上記の理由で多少不合理な値や大凡の値(最大震度)も含まれている事をお断りしておきます。特に興味深い性質や注意点を挙げると次の7項目が考えられる。

- ① 火打の接合部や部材の擦れによるキシミ音を減少させる効果
- ② 「板ジャクリ」と面内剛性の高い部材との接合部拘束と補強効果
- ③ 合板隅角部の応用集中の防止
- ④ 吹き抜け部分の胴差しの横揺れ防止
- ⑤ 木造一・地盤の連成系を考慮した構造設計
- ⑥ 部材の有効利用に繋げる最適設計  
(例えば施行・材料のグレード別倍率設定)
- ⑦ 木造の防振・免振・制振の研究

木構造は、永い歴史の割りには、未解決の部分が多く、材料・構造特性などに経験や現代解析学をうまくミックスした研究成果が待たれています。

第三に挙げた床の振動と振動感覚及び評価の問題は、次の音と密接な関係にあります。ここでは別々に考える事にします。

数年前から人間の五感を基準としていた現象も、種々の計測機器に置き換えられ、残念に思っていました。最近の曖昧領域を扱う「ファジ理論」とその適用は、認識・類推・洞察・直観などのクリस्प的数値で表現出来ない現象に本来の性格を取り戻させ、デジタル社会への警鐘と喜んでいる。床の日常的な振動感覚は、トワイライト現象であり、この実験も此等の部分を尊重して、体感による評価を試みたものです。図-3は、体重68kg身長175cmの男性の歩行・駆け足・尻餅が床にどのように作用するかを調べたものです。

歩行は体重とほぼ同じ力が加わり、駆け足では1.5倍、ジャンプでは複雑な応答を示し、最大2.5倍、尻餅では3倍となり、これは30kgの砂袋を30cm

の高さから落下させた効果とほぼ同じです。またタイヤ落下(重さ30kg高さ30cm)は、子供のジャンプに匹敵します。

此等を加振源として八種類の床と七種類の仕上げ材を組み合わせた試験体に対して、揺れ・気分・事務処理など9項目にしぼり、アンケート形式で試験しました。

図-4は、在来床1・2階と2x4床の感覚を主成分分析した結果ですが、それぞれの特徴が分布によく表れています。

表-7は、5種類の床と各種仕上げ材による性能をまとめたものです。この中の床組では、在来床が良く、仕上げ材では畳の良さが目立ちます。

試験者は、25人と少数ですが、人体感覚による床振動の性能評価は、図-5と評価式(3)で判断出来ます。(点線領域は、運動者の被感覚のため体育館の床の性能評価に適用する。)

この評価図と評価式は、データ数や客観的評価法など、幾つかの問題が残っており、簡便な試験法も含め、今後の研究に待たなければならない。

最後は最近話題の騒音・衝撃音問題です。個人の住宅では、大きく取り上げるまでに到らないが、集合住宅では、木造でなくても問題が多い。

表-8は、集合住宅の室内騒音に関するアンケート結果を示します。歩行・物を落とす軽量衝撃音や子供などの跳びはねなどの重量衝撃音及び水流の音が、いつも上位をしめています。

また、絨毯などの「ダニ騒ぎ」もあって、床をフローリングに改造した直後から、直下階の苦情が増えると言う現象も最近の傾向です。

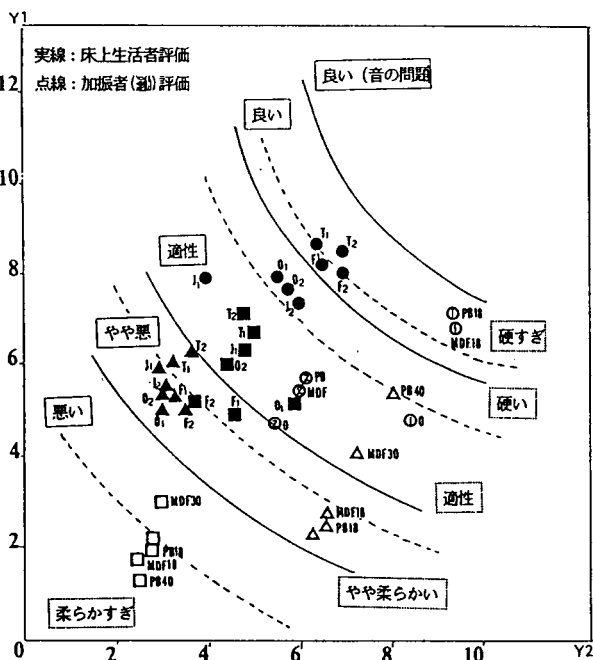
一般に騒音は、空気を振動させ伝播する空気音と物体を伝わる固体音に分けますが、前者は二重サッシや比重の大きな仕上げ材を使用すると比較的簡単に制御できる。ところが後者は、逆に固くて重いほど伝達特性がよく、厄介です。最近、クッション材や防音材と二重構造にした仕上げ材も製品化されていますが、木造だけでは、学会の最低基準(L-60, D-40)を満たすことは無理です。図-6は、木造床組の種類・仕上げ材の違いによる音の減少量を求めたものです。

日常騒音に対する意識は、年々過敏になり試験回数も増えているが、マンションの隔壁や床は比較的音にも気を使ってありD値で40程度のところが多く、昼間でも都内の夜間に近い所もある。水流と開口部及び建具の開閉音はどの建物でも聞

題が多い。管形状・配管と位置，二重のガラスやサッシ，建具や周りの構造の検討が必要です。しかし，125～500 Hzの音が無くなると，鬱病や非常に攻撃的な人間が増えると言う報告もされていますし，無響室に数分居ると不安になることも事実です。音の振動を熱エネルギーに変換し，暖冷房に利用する研究もされているが，いくら科学が進み新材や構法が開発されようが，最後は人間の心・人間的な「おもいやり」に落ち着くように思う。

以上，木造の最近の傾向を概観して来ましたが，金属の常温溶射により，在来構法の最大の欠点である仕口・継手も十分補強され，アルミを利用した吸音・遮音材の併用で，木の良さを最大限活かし，他の構造と比較しても優るとも劣らぬ強くて住み良い新しい木造住宅が完成するのも間近い。

- \* 1) 木村・光田 建築技術No.3281978
- \* 2) 十倉・翁長 建築技術No.4351987 (昭和42年卒業)



$$\begin{aligned} \star Y_1 &= 0.566 X_1 + 0.576 X_2 + 0.562 X_3 + 0.007 X_4 + 2 \\ \star Y_2 &= 0.091 X_1 - 0.056 X_2 - 0.052 X_3 + 0.956 X_4 + 2 \end{aligned}$$

$X_1$ : 砂袋  $X_2$ : タイヤ  $X_3$ : ジャンプ  $X_4$ : 振動数

- : 在来1階 ○: 在来1・2階
- : 在来2階 □: 集材根太床
- ▲: ケーブル T: 畳 J: 絨毯 F: フローリング
- : 仕上げ無 △: 積層パネル床
- P.B.: パネライクボード M.D.F.: 中比重ボード

図-5 木造床の振動感覚性能評価図と評価式

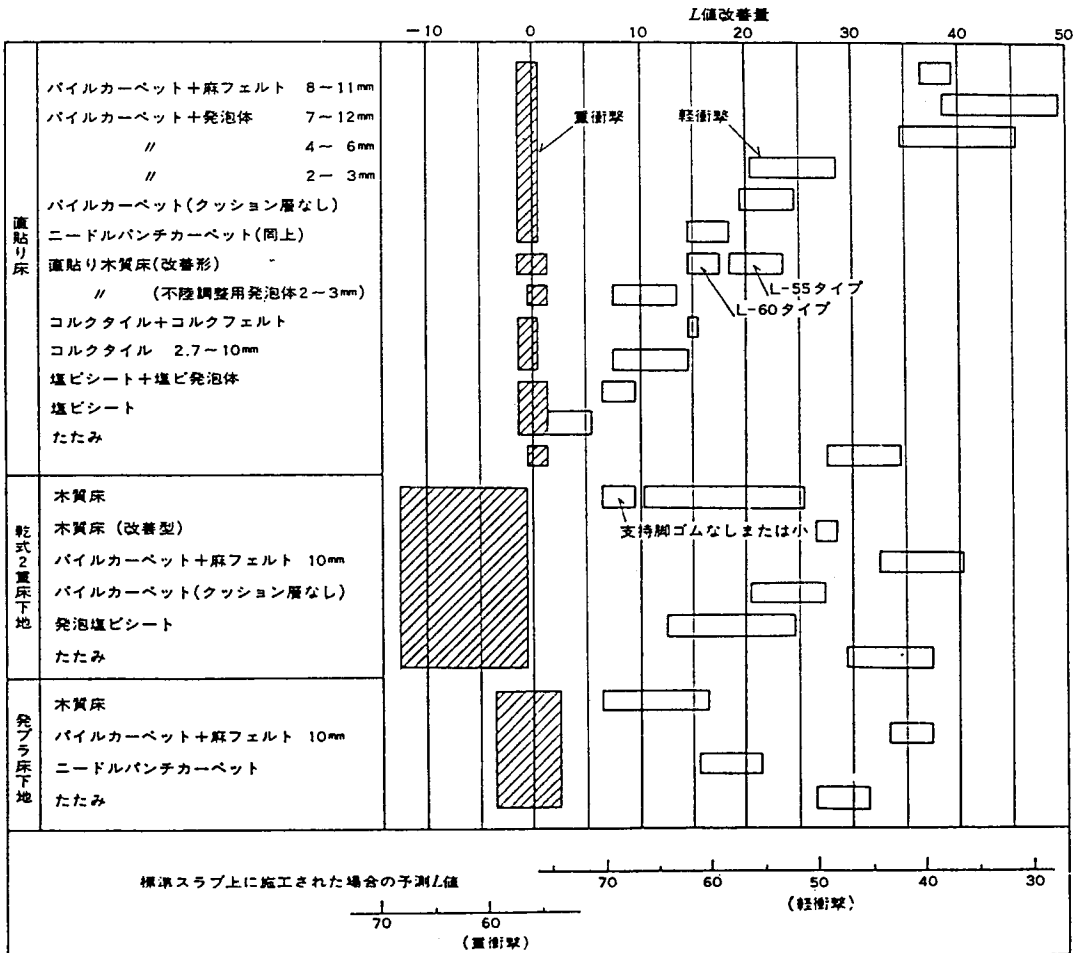
表-7 各種床組の性能

	積層パネル床集材根太床		在来1階				在来2階				ツーバイフォー				
	材の欠点の影響	組	単純	単純	大	複雑	大	複雑	大	複雑	中	単純	中	単純	
構	材の欠点の影響	組	単純	単純	大	複雑	大	複雑	大	複雑	中	単純	中	単純	
接	接合部	少	少	少	多	多	多	多	多	多	中	中	中	中	
接	合方法	簡単	簡単	簡単	複雑	複雑	複雑	複雑	複雑	複雑	簡単	簡単	簡単	簡単	
施	工	簡単	簡単	簡単	複雑	複雑	複雑	複雑	複雑	複雑	簡単	簡単	簡単	簡単	
法	レベル調整	簡単	簡単	簡単	複雑	複雑	複雑	複雑	複雑	複雑	簡単	簡単	簡単	簡単	
静	床下空間の利用	中	高	中	高	低	低	中	中	中	中	中	中	中	
的	床面の均一性	低	中	低	高	低	中	中	中	中	高	高	高	高	
的	方向性	大	小	中	小	中	中	中	中	中	小	小	小	小	
的	曲げ剛性	低	低	中	高	中	中	中	中	中	低	中	低	中	
動	周波数	34Hz	15Hz	30Hz	31Hz	34Hz	36Hz	17Hz	14Hz	15Hz	15Hz	16Hz	13Hz	12Hz	18Hz
的	減衰定数	0.07	0.04	0.10	0.13	0.10	0.08	0.05	0.07	0.05	0.04	0.05	0.05	0.04	0.03
的	振幅	中大	中	中小	小	中	中小	中	中小	中	中小	中大	中小	中大	中小
的	振動感覚	可	可下	良	優	良下	良	可	良下	可	良	可下	可上	可下	良下
そ	仕上げの影響	大	小	中	中	中	中	中	中	中	中	小	小	小	小
の	構造解析	簡単	簡単	複雑	複雑	複雑	複雑	複雑	複雑	複雑	複雑	中間	中間	中間	中間
他	施工技術	不要	不要	必要	必要	必要	必要	必要	必要	必要	必要	必要	必要	必要	必要

表-8 集合住宅の気になる騒音\*1)

集合住宅の室内騒音に関するアンケート結果

順位	上階の音	票	%	下階の音	票	%	隣戸の音	票	%	隣棟の音	票	%
1	跳びはねる音	94	27	玄関扉開閉音	18	6	玄関扉開閉音	20	5	布団を叩く音	16	4
2	走り回る音	84	24	建具開閉音	13	4	話声	19	5	楽器の音	7	2
3	室内の足音	60	17	跳びはねる音	10	3	子供の声	17	4	子供の声	5	1
4	便所給排水音	56	16	バルコニ物音	10	3	AV機器の音	16	4	話声	2	1
5	バルコニ物音	50	14	走り回る音	9	3	布団を叩く音	12	3	バルコニ物音	2	1
6	家具椅子の音	45	13	便所給排水音	9	3	楽器の音	12	3	AV機器の音	2	1
7	玄関扉開閉音	28	8	楽器の音	8	3	空調機器の音	11	3	空調機器の音	2	1
8	布団を叩く音	28	8	階段の昇降音	7	2	便所給排水音	10	2	階段の昇降音	1	-



# 八王子のまちづくりを考える

関 谷 真 一  
大 津 和 文

私達は、二人とも八王子で生れ育ちました。それぞれの生活体験をもとに、現在の八王子のまちをとらえ、将来のまちづくりを考えて来ました。

たまたま同じ地域で活動していたということで最近知合ったばかりというのが二人の関係です。ですから、八王子のまちづくりについて、必ずしもすべて同じ意見としてまとまっているわけではありません。むしろ、これから議論を深め、考えていかななくてはならない事がたくさんあるような

気がします。しかしながら、八王子の環境を少しでも良いものにして行きたいという点で同じ意見であることはまちがいありません。

今回は関谷が学生時代から八王子について考えて来たことについて、また、大津は八王子青年会議所のリーダーとして進めている動きについてまとめてみました。それぞれの考えに対し、より多くの方々からご意見をいただければ幸いです。

## 自ら住むまち八王子で考えて来たこと

関 谷 真 一

八王子へのこだわり

私が、八王子にこだわり続けている理由のひとつには、こどものころの体験がおおいに影響していると思います。小学生のときには、まちなかで遊んだり、近くを流れる浅川で魚とりや水遊びをしたものです。中学、高校生の時はまちなかを自転車で走りまわるのが好きでした。今でも時々、自転車で散歩にでかけます。

大学で建築や都市計画など、様々なことを学んだわけですが、毎日、通学の途中で見る八王子のまちの環境は講義の内容とは関係なく、益々悪くなっているような気がしてなりません。

地域の環境を良く知っている人間も参加したまちづくりが必要だ。もっと身近な環境を考える建築家や都市計画家も必要であるはずだと思いました。

卒業設計やコンペなど、八王子をテーマに色々なことをやって来ました。大学4年の時、建築学会のコンペと卒業設計で、八王子市街地から離れた外周部にある大学のセンターとして、「インター・ユニバーシティ」を計画。大学院1年のときには、八王子市から助成を受け八王子のまちづくりに関するレポートをまとめました。このレポー

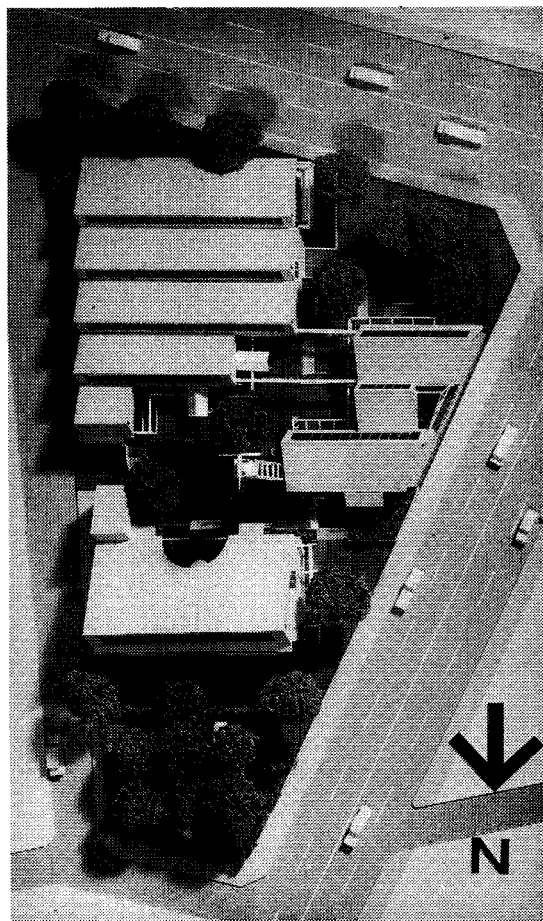
トでは、身近かでヒューマンスケールな環境、「まちかど」を基本にしたまちづくりを提案。修士論文は八王子市を流れる浅川をテーマとし、水系を軸にしたまちづくりの提案を行ないました。

大学院時代の「まちかど」と「浅川」というそれぞれの提案は、その時点としては、必ずしもきちんと完成されたものであったとは思えません。むしろ、私自身の大きなテーマとして、現在に、そして将来にもつながる“大きな未完成”であったような気がします。

大学院終了後、就職先を、あえて八王子の番匠設計にしました。設計活動は八王子近辺で行うことが、多くあります。毎日、自転車で通勤することを含め、仕事でもまちなかの環境をみつめる機会が出来た事は有意義でした。そして、何よりも地域の人間と多く知合えたのが大変良かったと思います。就職後、昭和56年度の「よみがえらせる郷土の建物」という課題の建築士会コンペに応募し、八王子の市街地のなかに数多く点在する、今では使われなくなった織物工場を市民の手工芸の場として再生する提案をし、入選することができました。

八王子以外での活動

八王子にこだわり続けていますが、八王子に活



建築士会コンペ  
よみがえらせる郷土の建物

動の場を限定しているわけではありません。まちに住んでいないとわからない事があるのと同時に外から見ないとわからない事もあるはずです。外から考える立場でいくつかの活動をしてきました。

長野県戸隠では、戸隠神社の門前にあるかや葺き屋根の宿房群の町並保存や自然を生かしたまちづくりの動きに関わってきました。町並の中で看板等、サインについて報告書を戸隠村に提出し、案内板のデザインも行いました。最近、地元では大手資本に頼るのではなく、住民自らの手で戸隠の観光を考えて行くために住民と行政で、第三セクターの会社を設立したとのことでした。

神奈川県三浦市の小網代で自然の生態系が集水域ごとそっくり残る森をゴルフ場として開発するのではなく、自然教育の場として生かし、宮沢賢治の考え方を参考に、これからのライフスタイルを提案して行こうという、「ポラーノ村を考える会」に参加しています。ポラーノは宮沢賢治の作品、「ポラーノの広場」から付けた名前です。

これらの活動から数多くのことを学んだのと同時に、八王子を違った視点から見る事ができたと思います。

#### まちかどパネル展

5年ほど前にトヨタ財団研究コンクールの応募をきっかけに数人のメンバーで「八王子まちかど研究会」をつくりました。残念ながら助成を受けることは出来ませんでした。その後、少しずつまちなかや川辺を歩いて写真を撮ったり、まちかどの建物のスケッチをして来ました。

88年の暮、八王子市役所職員の自主研究グループである「八王子ランドマーク研究会」のゲストとなり、八王子で考えて来たことについて、話をする機会を得ました。今まで撮り溜めて来たまちなかの建物や浅川のスライドを写しながら、まちかどという身近な環境を基本にしたまちづくりについて、また、それをつなぐために、浅川という水系を生かして行くべきであるという話をしたわけです。

そして、その場で私の撮ったまちの建物の写真とスケッチを中心に「まちかどパネル展」をやろうということになりました。さっそく、休日等を利用してまちなかを歩き回り、面白そうな建物や植物などを路上観察学的な視点も折込みながら調査が進められました。文化財ではないけれども、日常生活の中でいつも見掛ける環境になじんでいる建物。住民にとってある意味ではかけがえのない建物を捜し出したいと思いました。

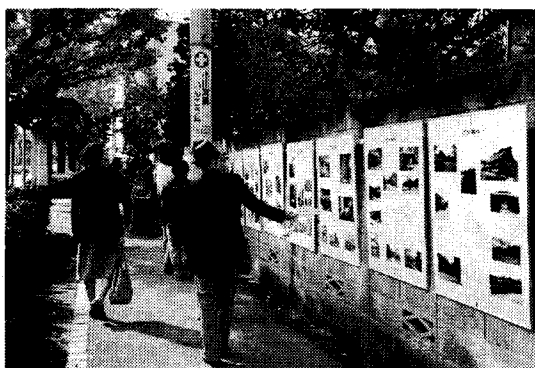
連夜の作業が続けられて、写真約200枚、スケッチ12枚がB1パネル26枚にレイアウトされました。6月末の1週間、八王子市役所ロビーで「まちかどパネル展」が開催されたのです。連日、数多くの方に見ていただき、昼休みなどはパネルの前が人でいっぱいになるほどの大盛況。「八王子にもこんなに沢山の素敵なお建物があつたのか。」「ふだん、なにげなく見ている建物の良さが改めて分かつた。」等々、多くの方から貴重な意見をいただきました。

毎年、11月に甲州街道沿いのいちよう並木で行われている「いちよう祭」でも、あるお宅の塀を借りてその塀にパネルを展示しました。その後、ある銀行にパネルを貸出して、ロビーに展示していただきました。今年は、市内のいろいろな所で巡回展を行う予定です。



パネル展で展示したスケッチで絵葉書をつくりました。スケッチは今までに、年賀状と暑中見舞用として画きためてきたものと、今回、画き加えたもので12枚セットです。

まちかどパネル展と絵葉書セットによって市民に、自分のまちにもこんな素敵なものがあること



いちよう祭でまちかどパネル展

を知ってもらう。そして、自分のまちも捨てたもんじやないという気持ちになってもらいたい。住民が自ら住む町を好きになり、誇りを持てるようになることがまちづくりの基本になるはずです。パネル展と絵葉書セットがそのきっかけのひとつになってほしいのです。

パネル展等がきっかけとなり、現在、都市計画課が昨年から進めている八王子市の景観調査にコンサルタントのメンバーの一人として参加しています。私の担当しているのは、パネル展のテーマでもあった、文化財ではなくとも住民に親しまれ、まちの環境になじんだ建物についてまとめることです。3年間にわたる仕事ですが、最終的には、まちづくりを行ったり、建物を建てる際の景観上のガイドラインをつくることになっています。

#### 浅川・ウォーキングマップ

昨年の夏、八王子市都市計画課主催で「まちかど探検隊」という企画が行われました。これは、まちを歩いてみて気になるもの、良いと思うものの写真を撮ったり、絵を画く、音を録音する、まちなかで体験した事などを自由な表現方法でまとめ、報告してもらおうというもの。子どもからお

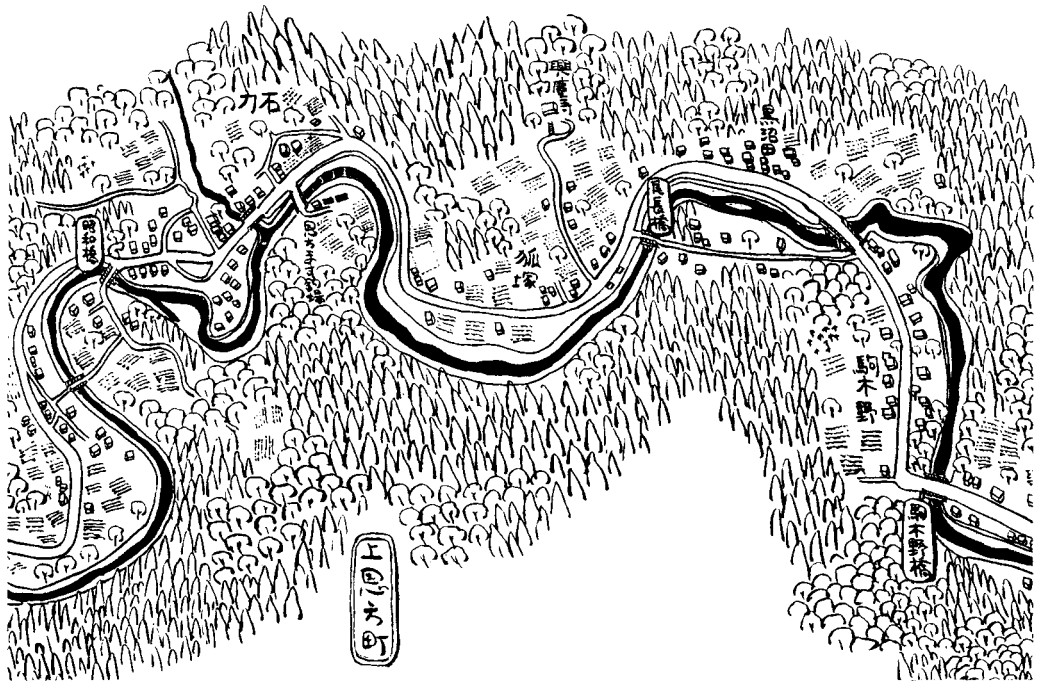
年寄まで、八王子市に在住、在勤の人であればだれでも参加できる企画です。6才の子どもから80才を越えるお年寄まで、91点の作品が寄せられ、参加した人数は延べ200人を越えました。

小学生が担任の先生とともにひとクラス全員で参加して学校のまわりの古い道沿いの歴史を調べた作品(グランプリを獲得)。お年寄がグループで古い家を調べたり、炭焼きを体験した報告もありました。面白いところでは、小学生の女の子の作品で、近所の犬を調べて、写真を撮り、その泣き声をテープに取ったものがありました。

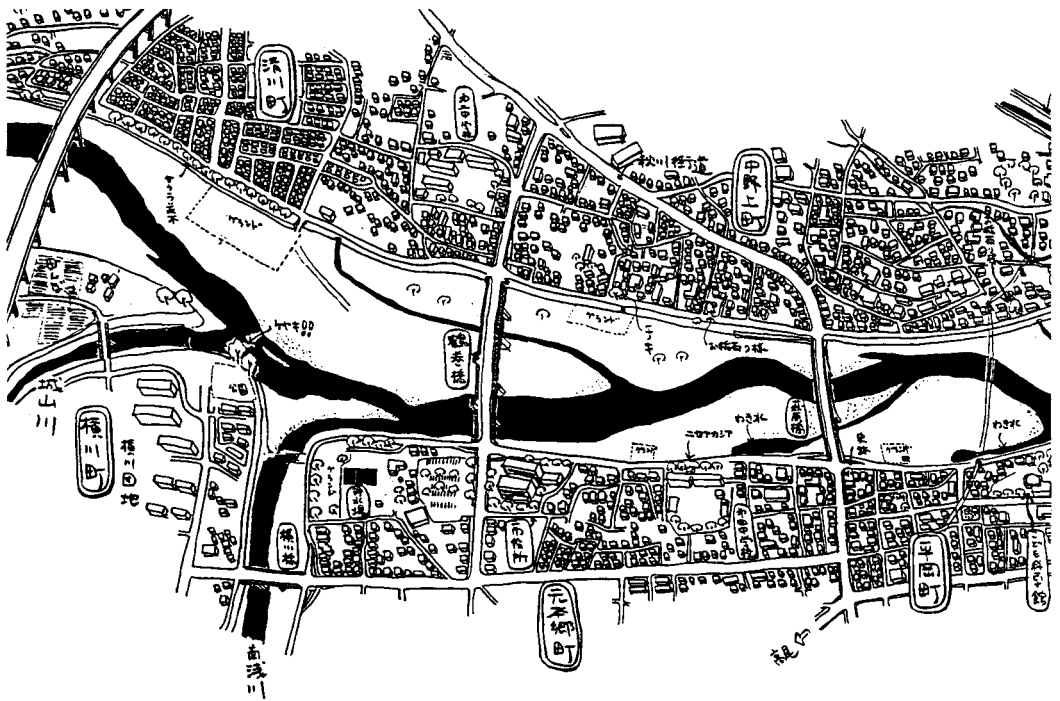
私も植物に詳しい友人と二人でこの企画に参加しました。八王子市街地を流れる浅川をテーマとした「浅川ウォーキングマップ」をつくり、運良く準グランプリを獲得する事が出来ました。下流から上流まで川沿いの絵地図を画き、その両側に浅川を歩いて撮った風景や植物などの写真を張りコメントをつけてまとめたものです。

私達自身も改めて浅川の素晴らしさがわかりました。浅川は緑の少ない市街地の中では貴重な自然ですし、川沿いには雑木林などの自然がかなり残っています。特に、上流の溪谷の様な景観の美しさは特に印象的です。このマップによってより





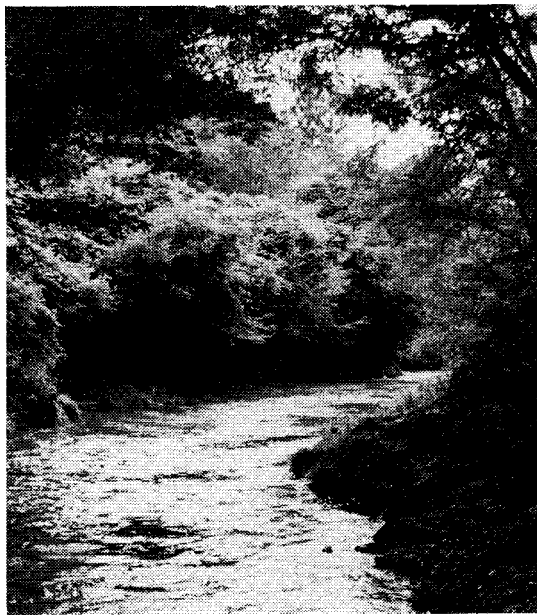
浅川ウォーキングマップ（上流部分）



浅川ウォーキングマップ（下流部分）

多くの方に浅川の素晴らしさを知っていただきたいと思っています。

尚、今年、1月に東京都提供の「みどりのびのび」というテレビ東京の番組でまちかど探検隊が



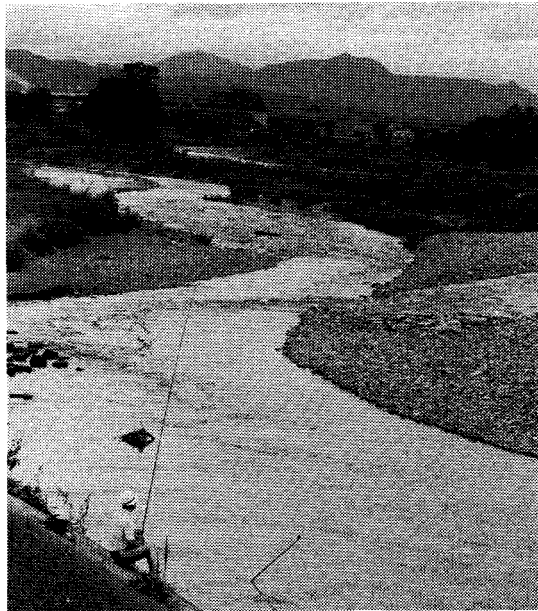
浅川上流

は私自身のライフワークのひとつです。これから急激に開発の進むであろう八王子において、自動車交通から分離された、安全で静かな身近にある自然環境として浅川を生かしたい。川沿いは植物や動物などのために、現在の緑を保全し、新たな緑化を行い、小動物が移動できる程度の緑の帯をつくりたいと思っています。川沿いには自動車交通はなるべく入れずに、遊歩道や自転車を整備するなど浅川を歩く事を基本にした軸にする。河川によってつながる線的な帯状の公園を作ってしまうかと思っています。八王子は自前の水源地を持ち、まだ自然が残っています。都市のなかに自然のままに近い景観を少なくとも浅川沿いに残すことが私達の未来の子ども達に対する最大のプレゼントではないでしょうか。ふだん、すぐに散歩に行ける自然、それも人工的でない自然こそが浅川の魅力なのです。

図書館や美術館やその他の公共施設も浅川の軸線を意識して作る。川沿いの遊歩道や自転車道からのアプローチを考えた計画を行うべきです。

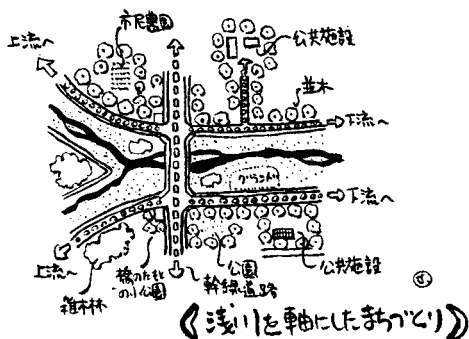
紹介され、私の作品もそのなかで取り上げていただきました

浅川は私の子どもの頃の遊び場、大学院の時からテーマでもあり、浅川を生かしたまちづくり



浅川

八王子は、東京との関係を保ちつつ、自然の豊かな生活環境を持ち得るまちです。浅川という自然の軸を基本とした、八王子ならではの自然豊かな文化の軸を作ることが出来るのではないのでしょうか。



おわりに

まちづくりは都市計画コンサルタントが、短期間にまとめる仕事だけでは出来ないと思います。もちろん、コンサルタントの専門的な意見や情報は必要ですし、外から見る立場として重要です。

しかし、それと同時に地域を知り、これから将来にわたって、永い時間をかけてまちづくりの活動を続けることの出来る住民の存在が必要なのは言うまでもありません。住民としての建築家の役割は今後、ますます大きくなっていくでしょう。

ひとつのまちをずっと眺めていることで見えないことが見えてくる。ひとつの地域により多くの建築を集中して作ることによっても、まちの環境

により多くの影響を与えることが出来るでしょう。当然、何かを行うにあたって責任があるのはいうまでもありません。

住民が自ら住むまちを考えるまちづくりとはどのようなものか、八王子をテーマにこれからも考えて行くつもりです。もちろん、おもいっきり楽しく。

関谷 真一

昭和54年 3月 工学院大学卒業

昭和56年 3月 同大学院修士過程修了

昭和56年～ ㈱番匠設計

## 八王子青年会議所運動とまちづくり

大津 和文

### 1. 青年会議所 (J. C) に参加して

私は、工学院大学、大学院とお世話になり、さらに荻原先生のアトリエで約5年間実地の経験をさせていただいて、実家のある八王子で昭和56年に設計事務所を設立し現在に至っております。

地元でしばらく活動しますと小中学校の旧友や高校の悪友とのつき合いが再び自然に起り、5年前に月2回の例会の出席だけで良いという友人の進めもあって青年会議所という団体に入会しました。

入ってみたらぜんぜん話しとは異なり集まる回数が非常に多いので仕事も忙しいし、かなりとまどいました。この団体はまず多種多様な業種の人達の集まりであり通常の会合は仕事が終わった7時ごろより始まり、コーヒー一杯で2時間から4時間激論をかわし、終われば近くの居酒屋などで大きな声を出した議論をしたり談笑したりしてすぐ午前様になるなど、極めて真面目なこともそうでないこともエネルギーにするという団体であります。

実はその後解ったのですけれどもこの青年会議所という団体は1905年にアメリカでハーキュリーズ・ダンスクラブという古いステップを守る会がその基礎となった団体だそうです。この年は、シカゴでロータリークラブがポールハリスという弁護士を中心に設立された年でもあります。日本では1949年の戦後の復興期に東京で発足しました。このときの中心メンバーはミツワ石けん現会長三

輪善兵衛氏の他、労働組合のメンバー、会社員、女性などであり、多様なメンバーで構成するという意図が明確に出ていました。その様な起りのなかで40年という歴史をもつ様になりました。

その中で活躍なさった方で皆さんがご存知な方では服部礼次郎、森下泰、千宗室、石川六郎、牛尾治郎、麻生太郎、鴻池祥聲、斉藤斗志二氏等すべて会頭を経験なさった方ばかりですがJC経験者の衆議院議員は現在70名を越える人が活躍なさっております。なお地方レベルではかなりの人材がJC出身者であるといっても過言ではなさそうです。

私が所属する社団法人八王子青年会議所の概要を簡単に述べると、(社)八王子青年会議所は、1966年全国で330番目の会議所として創立以来「浅川清掃」「献血」「林間彫刻教室」「市民まつり」等の活動を続け、近年では「行財政改革運動」「経営開発セミナー」「青少年海外派遣事業」等々の事業を展開してきました。また創立以来続けられてきた高尾山を中心として子供達を主体に活動してきた「八王子森林パトロール隊」が内閣総理大臣賞を受賞いたしました。(社)八王子青年会議所は現在約170名の会員で構成され、よりよい21世紀のまちづくりを目指し活動しています。

その様な流れのなかでここ5年ほど前から新しい動きが起きております。それは「明るい豊かな街」をつくるにはより提言型の運動を起こさなければいけないという考えであり、私達はそれをニューCD運動(新しいコミュニティーデベロップメントの運動つまり新しい視点での社会開発運動)と称し

それを起こさなければいけないということです。それをもうすこし解りやすい言葉で述べたのが「総合的街づくり運動」というネーミングです。以下にその流れを簡単に述べたいと思います。

## 2. HD 21の作成

総合的街づくり運動を進めるに当たってまずその意味づけとタイムスケジュールを明らかにしました。まずJ. Cが政策提言型の集団にならなければいけないという観点にたつて論理的に述べたのがHD 21という小冊子です。1984～1985年の2年がかりでまとめました。その中で、今後のスケジュールを5年と決め、その内容を明らかにしました。

- ・ステップ1－まちづくりの科学的データの収集・整理
- ・ステップ2－その発展
- ・ステップ3－まちづくりビジョンの発表
- ・ステップ4－その推進
- ・ステップ5－実現に向けての市民会議の設立

というのがその時策定されたスケジュールでした。これらの流れを通じ最も根幹となった考え方は、「その街に住む一人ひとりの市民が自分達の街は、自分達の手でつくるという意識を持ち、その意識をもった市民によって構成された街が“明るい豊かな社会”である」という定義づけであり、まさに市民自治意識の確立をめざすものでありました。

## 3. 八王子市生活環境指標の作成

1986年にHD 21の流れにそって、600万円というJCにとっては巨費を投じ「八王子市生活環境指標」を作成しました。JCメンバーの献身的な努力(5ヵ月間の毎晩の作業、理事長の1ヵ月以上の入院、ドクターストップ1名)によってつくり上げました。まさに、肉屋さん、八百屋さん、建築屋さん、織物屋さん等普通の人々が今でも図書館で活用されている資料をつくったのです(八王子市役所に行きましたら市政資料室に入って下さい。手あかのついた「指標」があります。)

ここに当時の第21代理事長、馬場栄次氏の発刊の言葉を引用すると「……ところで現代の複雑、多様化した社会においては、市民が行政に、あるいは街づくりに直接関与し、参加、参画していかなければ決して明るい豊かな社会を構築していくことは不可能であります。しかし市民が行政や街づくりに積極的に参加、参画するとしても市民に、街に関する客観的かつ総合的資料が提供されていなければ市民一人一人が対等の立場で街づくりに

## 八王子市生活環境指標INDEX

### I基礎指標

#### (1)自然

- ①八王子の位置
- ②自然の地形
- ③緑の分布

#### (2)歴史

- ①市域の変遷
- ②文化財/神社/仏閣
- ③人口密度/人口増加率

### II生活基礎指標

#### (1)生活

- ①行政区/管内区域
- ②町会/自治会
- ③老人会/子供会
- ④公共施設
- ⑤集会所
- ⑥公的スポーツ施設
- ⑦公園/広場
- ⑧上水道
- ⑨下水道
- ⑩不燃ゴミ収集区域
- ⑪可燃ゴミ収集区域
- ⑫福祉施設
- ⑬選挙投票区/投票所
- ⑭医療機関

#### (2)教育

- ①公的文化・社会教育施設
- ②幼稚園/保育園
- ③小学校
- ④中学校
- ⑤高等学校/大学

#### (3)保安

- ①警察署/消防署
- ②広域避難場所/防災無線
- ③公害

### III都市基盤指標

#### (1)土地

- ①区域指定/市有地

#### (2)交通

- ①道路計画
- ②バス路線/駅利用率
- ③交通規制/安全施設
- ④交通事故

### IV産業基盤指標

- ①大型工場の分布
- ②織物工場の分布
- ③農林業
- ④商店街/大型店舗
- ⑤金融機関/郵便局/農協
- ⑥観光と祭り(宿泊施設)

### V近隣都市比較指標

ついて討議も出来ないし、問題意識さえ持ち得ないと考えます……。八王子市生活環境指標は、八王子市の街の姿が一目で解る様に市民生活環境を指標化、図表化し、地域間の生活環境格差を明確にし、かつ他の都市との行政水準の比較をして今後の八王子市の総合的街づくりのための客観的資料とするため作成したものであります。そしてこの指標は情報公開、市民自治意識の確立へ向けても大きな役割を果すものと思います。……」であり、その作成にあたった主旨を明確に述べております。なお作成に当り法政大学教授松下先生に指導していただきました。

## 4. コミュニティカルテの作成

1987年の2年目は客観的、科学的データであった生活環境指標を一步進める意味で現地調査、アンケート調査を実施し診断という手法を使い問題点と対策を明らかにしました。ただし市全域は物理的に無理であった為、市北西部に位置する旧川口村を対象として行いました。

川口地区は、市街地より約10kmの距離にあり川口川と北浅川にはさまれ、その中央を秋川街道が東西に走る地区です。鎌倉時代に川口氏により繁栄した地区で、現在でも、あちらこちらにその面影が感じられます。川口地区も昭和45年頃は約3,800人位であったが、現在では約10,700人です。これは住宅が急増し都市部のベッドタウン地区になりつつあるからだと思われる。しかし、人口が増

えるにしたがい川の汚染、道路、下水の不備、交通量も増加し交通の渋滞が深刻となっています。一方人口急増地区ですが、他の地区に比べて、コミュニティ活動が活発な所でもあります。商・工・農業等の産業は特にめだつたものはなく、全体としては住宅地区といえます。

以上のことを踏まえ地区の問題と対策を提言しました。ここでは東大名誉教授、日笠先生の指導をいただきました。

#### 5. 「合流都市・八王子」の発表

3年目の1988年度はいよいよビジョン「合流都市・八王子」を発表することになりました。それは八王子市の中心部を流れる浅川を中心としたまったく行政では持ち得なかった新しい発想のまちづくりの考え方です。当時の第23代理事長である三浦眞一氏は報告書の中で次の様に述べています。「街は人の手によって創られ、人の手によって後世に伝えていかねばなりません。そのためには現在のみならず未来への展望を持った上で、街を考える必要があると思います。私達の街「八王子」は187km<sup>2</sup>という広大な面積の中に44万人の人々が生活しています。そしてこの街は古い歴史と豊かな水と緑を持っています。また新しい時代の流れの中でハイテク都市・学園都市・商業都市・住宅都市という多面的な顔をもっています。加えて21世紀には70万を超える人々が国際的業務核都市という位置付けの中で学び、働き生活をするようになるでしょう。(中略)本紙は21世紀の我が街「八王子」をビジュアルに描いた市民の手による市民のための活力ある街づくりへの提言であり、憂市の志を持つ多くの市民と共に街を語り未来を語るための題材であります。そして今後は時代の流れに適合した修正を加えながら実現に向けての行動を興し、未来社会の一里塚の役割りを果たすべく努力を続けてまいります……」

以上で述べられている通りその主旨にそって全力投球したビジョンでありその後も多方面に訴えつけています。

#### 6. 「44万人浅川ふれあいキャラバン」

1989年度は、前年度策定した「合流都市・八王子」の具現化へ向けての一年でした。なにができるかという議論のなかで浅川をもっと良く知ろう、川が市民の中に共通の話題となるべく認識を深めようという企画で「44万人浅川ふれあいキャラバン」を行いました。青年会議所の思いは1989年度

第24代理事長である野口文男氏が述べています。

「古代より人々の生活は水と共にあり、我がまち八王子市も浅川と共に発展を遂げてまいりました。そして今、私達の住んでいる八王子も国際化、高齢化、情報化社会の進展に伴い事業や経済の構造のみならず私達のライフスタイルまでもが大きく変わろうとしています。このような時代の背景の中で(社)八王子青年会議所は、街の将来はどうあるべきか、まちは誰の手によって創られるべきかを真剣に考えてまいりました。そして、母なる川浅川を基軸とした総合的な開発が21世紀へ向けての明るい豊かな、そして、いきいきとした八王子の街を作る道だと確信いたしました。……」キャラバン当日の参加者は、44万八王子市民の思いを背負って浅川の源流を訪ね八王子の将来について多くの市民の方々と語り合う事が出来ました。今後は、浅川の水面に投じた小石の波紋が八王子のまち全体に広がって行く様に努めてまいりたいと思います。

以上の主旨を踏まえてビジョン推進のその他の事業が行われました。

#### 7. 最後に

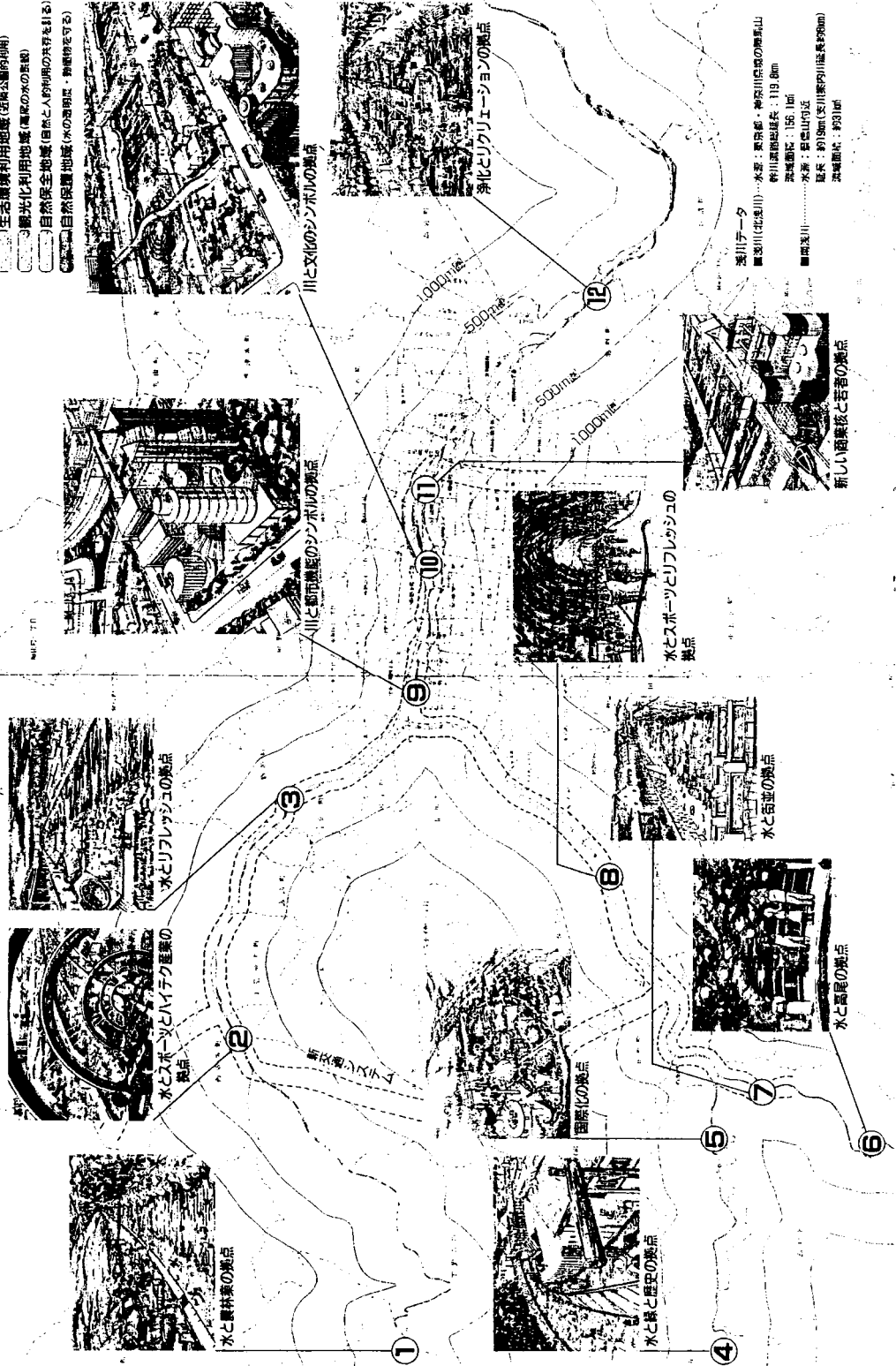
以上青年会議の概要から私の所属する(社)八王子青年会議所のまちづくりの最近の動きを述べさせていただきました。なお八王子J・Cの運動はこれだけでなく韓国への子供達の派遣、また受け入れ、経営セミナー、青少年開発、八王子まつりへの参加、世界会議、アジア会議、全国大会等、様々な活動をしております。これらはみな自己の修練、社会への奉仕、世界への友情という理念にそったもので全国各地で頑張っているわけであり、私自身は環境指標に最初にならずさわって以来まちづくり運動を歩んで来ましたが、地域のまち医者でありたいと願う私の設計家としての気持と相通じるものがあり随分勉強になることが多々ありました。私のJ・C活動は残り2年です(定年40才)。本年度は八王子では工学部出身のはじめての理事長としてあわただしい年を送っております。人生の一つの修練と思い頑張っています。

#### 略歴

昭和49年	工学院大学建築学科卒
昭和51年	工学院大学大学院修了
昭和51～56年	(株)萩原正三建築計画研究室
昭和56年～	OM設計室主宰(八王子市にて)

# マスタープラン

- ① 都市的利用地域 (積極的に利用すべき地域)
- ② 生活環境利用地域 (広域公園的利用)
- ③ 観光利用地域 (歴史の水の景観)
- ④ 自然保全地域 (自然と人間の共存を図る)
- ⑤ 自然保護地域 (水の源頭は、景観を守る)



**瀬川テータ**  
 ■瀬川(北浅川)……水源：東京都・神奈川県 神奈川県の海老山  
 幹川源流距離：119 km  
 流域面積：156 km<sup>2</sup>  
 水源：野島山付近  
 延長：約19km(宇川(野島山)延長約9km)  
 流域面積：約31km<sup>2</sup>

新しい商業核と若者の拠点

# さあスタート！ 頑張ろう

2 暑かた気味も、この一帯から、



3 暑ゆもして、いっせつしい



4 奥のほう「奥のほうでござい、



6 CP2、奥のほう川原の奥の奥



12 CP3、小田野の中尾山麓



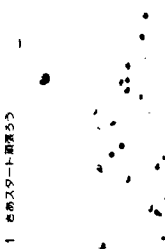
5 CP (チエツポイント) 1、新田川原地区、



8 奥のほうの奥のほうはよつと奥の奥、



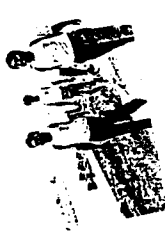
11 奥のほうにも奥のほう



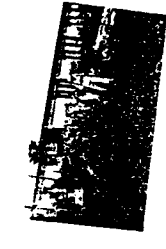
4 奥のほう「奥のほうでござい、



6 CP2、奥のほう川原の奥の奥



8 奥のほうの奥のほうはよつと奥の奥、



11 奥のほうにも奥のほう



# ふれあいうオーク

1989. 8. 15

13 桜井を渡りかけ



17 5.2kmの奥の奥、



15 みなはだの、しりかもある日



18 奥のほうの奥の奥で……



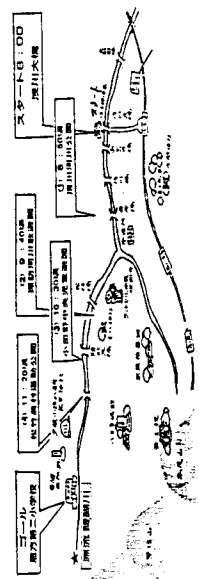
19 奥の奥の奥の奥の奥の奥、



18 やつたノ奥の奥の奥の奥、



21 やつたノ奥の奥の奥の奥、



## 千葉 稔さん (昭和35年卒) 第8回朝日似顔絵大賞受賞

外れがない。確かな画力の持ち主である。入社後回を重ねて「似顔絵」の特待生になるまで出た。た。くらは一度も入道しなかつたんです。子供のころ、ゲリー・クーパーとかラン・ドルフ・スコットとか、西部劇俳優のプロマイドのそっくりな面を描くのが好きだった。その延長上の絵を出してたんです。でも、これは佳作と見られて分かつた。ひとりで、茶室の壁を主体にした粗いタッチのクレヨン画

「一目で千葉作品の分かる画風を確立した。モリス、田中邦衛さん、栗原正史さんなどが中年の若い男たち。」「あのタッチで女性を描けないですよ。愛の恋」

「似顔絵の作品は、モデルにかなり意識的な特徴を注いだものが多く、それは魅力の1つになっていた。この人た新緑はほとんど、」

（近）(実生記)

第8回週刊朝日似顔絵大賞を受けた

ちば 葉 稔さん



東京・駒込の生まれ。工学院大学の一般建築士。妻、弟と建築設計事務所を営む。5年ほど前から「週刊朝日・山藤堂」の似顔絵に好評。二女一男の父。57歳。

USJUN 毎年、大賞候補になつたが、作品数が少な過ぎる。と選ばれる。選んで貰っていた。頑張った年でも年間十四点の作品である。

「君、基本的に好きな人物が描く気にならないものだから……。アマチュアの特権でしょか」

もともと美術関係の学校に進んでいこう希望を持っていったが、工務店を経営していたから、「絵で食えていられない。」「反対して、建築設計の道を選んだ。だから、絵は絵業が壊れていって、いずれは似顔絵大賞を狙っていたが、意外にうまくいきました。」「」

(朝日新聞平成元年12月10日)

## 工学院大学校友会創立90周年記念式典挙行

建築学科同窓会副会長 小高 鎮夫

平成元年11月11日11時そして正確には11分に新大学棟（28階）の階段大教室にて校友会創立90周年記念式典を挙行政しました。当日建築学科同窓生は71名の出席がありました。続いて開催した28階での祝賀パーティーでは仲間て久振りの懇談会、その後で同期会、研究室同窓会など、友達との再会を楽しむことができました。

報告のあった会の名をご報告します。

短期大学建築学科卒

35周年記念クラス会

大学第一部建築学科卒

30周年記念クラス会

大学建築学科萩原研究室

25周年記念パーティー



祝 創立90周年記念式典  
社団法人工学院大学校友会

ご逝去のお知らせ  
校友会相談役で建築学科の大先輩であった松本与作氏が平成2年3月9日心不全のため逝去されました。99才でした。故人は東京駅、第一生命館などの設計に関わり、日本の建築界の先輩でもありました。慎んでご冥福をお祈りします。



第23期(1988年)財産運用報告

	収 入	支 出
三井信託	0	0
三井信託 (積み立て口)	336,919 (2,665,643-2,328,724)	0
第一勧銀	452,863 (779,534-326,671)	0
郵便振替口座	0	0
計	789,782	0

会計監査報告 平成元年4月20日

帳簿、領収証監査の結果、記載が正確である事を、認めます。

建築学科同窓会監査委員 大塚 毅 印

近藤 龍哉 印

第24期(1989年)一般会計予算

(単位:円)

収 入	支 出
1) 前年度繰越金 <u>779,534</u>	1) ニッチ発刊費 <u>1,170,000</u> ① ニッチNo.13印刷費 940,000 ② 編集費 200,000 ③ 雑費 30,000
2) 会 費 <u>1,593,000</u>	2) 各部会費 <u>120,000</u> ① OB通信費 120,000
3) 総会発送援助費(校友会より) <u>670,000</u>	3) 同窓会名簿整理費 <u>1,000,000</u> ① 1990年名簿印刷費 960,000 ② 整理費 20,000 ③ 郵送費 20,000
4) 雑収入 <u>1,700,000</u> ① 同窓会名簿売上 600,000 ② ニッチ賛助金 1,000,000 ③ 広告料 100,000	4) 準会員援助費 <u>0</u> 5) 総 会 費 <u>2,330,000</u> ① 総会通知印刷費 350,000 ② 総会通知発送費 1,900,000 ③ 懇親会費 50,000 ④ 雑 費 30,000 6) 本 部 費 <u>30,000</u> 7) 予 備 費 92,534
合 計 4,742,534	合 計 4,742,534

1990年版同窓会名簿

同窓会員販布額 5,000円(含送料)

会 員 外販布額 30,000円(含送料)

ニッチの賛助金と同じ振込用紙と一緒に御送金下さって結構ですが、裏面に名簿代5,000円と別記して下さるようお願いいたします。

この記入がないと、全額、ニッチ賛助金とみなされてしまいますので、よろしくお願い申し上げます。

#### ■編集後記

皆様お元気でお過しのことと存じます。

今号のニッチも何とか発刊できることになりました。昨今の世界状況に反してニッチの編集は情性的になっているかなと自己反省しているところです。昨年9月以来の新大学棟における新たな学園生活もどうか軌道にのってきたようです。施設の利用上の評価は個々によって分かれるようですが、学生諸君の勉学の熱意が強まったなんていう声もきかれます。

さて今号の記事は恒例の先輩を訪ねるシリーズは厨房設備製作の先駆となった鈴木啓之氏をお伺いしました。大塚氏には構造関係の記事をお願いし、若手の関谷、大津両君には八王子市における実践的な「まちづくり」の運動の経緯を書いていただきました。もともと建築は雑学だとかいわれますが、今後もできるだけ幅広い分野でのOBの活躍を紹介したいと思っています。

(初田, 岩田記)

ニッチ VOL.14 平成2年3月20日

発行 工学院大学建築学科同窓会  
東京都新宿区西新宿1-24-2  
〒163-91 TEL (03)342-1211 内2025

編集者 初田 亨・岩田 俊二

印刷所 (株) プ リ ン ト ボ ー イ  
東京都千代田区神田神保町1-20  
〒101 TEL (03) 295-9761





